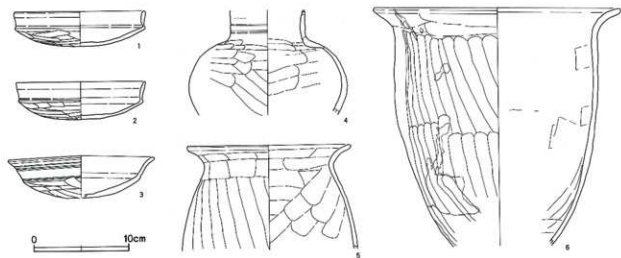
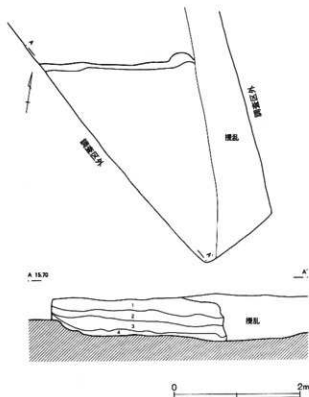


第584图 H区第2号住居跡出土遺物

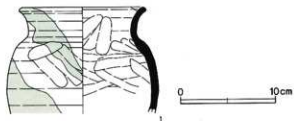


第585图 H区第3号住居跡・出土遺物

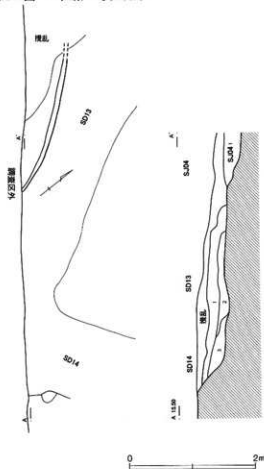


第3号住居跡

- 1 黒褐色土 白色火山灰(浅層?)粒少量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量 炭化物層が薄く堆積
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒・炭分粒多量



第586图 H区第4号住居跡



第4号住居跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒少量

第13号・14号住居跡

- 1 黒褐色土 粘土粒・黄褐色土粒少量
- 2 黄褐色土 黄褐色土7~8μ主体 黒褐色土
- 3 黒色土 黄褐色土粒・炭化物粒

2. 掘立柱建物跡

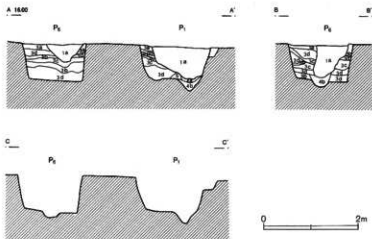
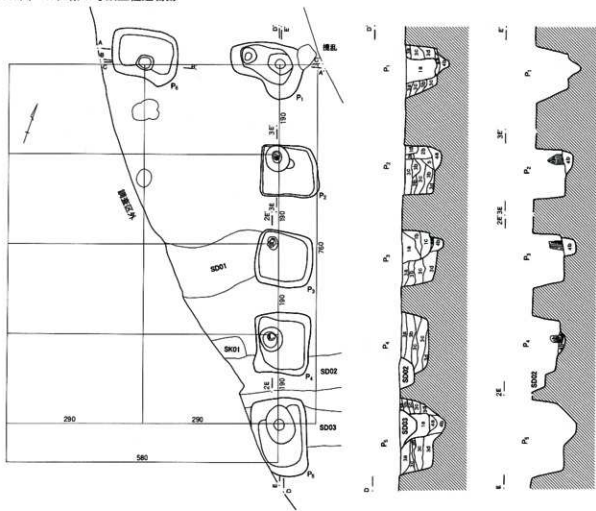
第1号掘立柱建物跡 (第587・588・581図)

桁行4間以上×梁行2間以上と想定される側柱掘立柱建物跡である。V21、W21グリッドに位置し、南半は調査区外にある。第1号土壌、第1・2号溝跡と重

複する。

柱間は桁行1.90m、梁行2.90m、最小規模は桁行7.60m×梁行5.80m、面積44.08㎡と推定される。桁行は東西に面し、軸方位をN-18°-Wに向ける。

第587図 H区第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡

1 柱抜き取の人為的破壊

黒褐色土とお黄褐色土7"bの混合層

a 黒褐色土85%+黄褐色土15%

b 黒褐色土85%+黄褐色土5%

c 黒褐色土30%+黄褐色土70%

d 黒褐色土と黄褐色土がほぼ均等

2 柱抜き取時の柱痕跡欠

a 黒褐色土 粘土欠

b 黒色土 粘質土

3 柱痕形充填

a 黒褐色土+黄褐色土

b 黒褐色土主体 黄褐色土7"b少量

c 黒褐色土7"b少量+黄褐色土7"b少量

d 黄褐色土7"b少量+黒褐色土少量

4 柱根跡の掘り込み充填

a 49-7"灰色の軽い粘質土 黒褐色土粒

b 49-7"灰色粘質土の純層

5 柱根固定 黒褐色土 49-7"灰色土7"b

柱は抜き取られている。その際に、途中で折れてしまったものなどはそのまま放置され、P2・P3・P4・P5のように柱痕が残存している。このうちP2・P3・P4からは放置された柱材の残欠が発見されている。柱位置はビット状に掘り込まれ、粘質土が固めとして充填されている。柱掘形は方形を基本とし、隅柱はL字形をしている。黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が版築状に丁寧に衝き固められている。

遺物は図示したほかに、須恵器甕・坏片、土師器甕・坏片が出土している。

第2号掘立柱建物跡 (第589・581図)

桁行2間×梁行2間と想定される総柱掘立柱建物跡で、一部、柱掘形が溝によって連結されている。S19、T19グリッドに位置し、一部を攪乱され、第3号掘立柱建物跡、第6・7号土壇、第8号溝跡と重複する。

柱掘形底面に残存する柱痕から2回以上の建替えが推測されるが、土層断面から把握することができた建替えは1回のみである。

建替え後の柱間は桁行1.55m、梁行1.30m、規模は桁行3.10m×梁行2.60m、面積8.06㎡を測る。建替え前の柱間は桁行2.00m、梁行1.95m、規模は桁行

4.00m×梁行3.90m、面積15.60㎡を測る。桁行は東西に面し、軸方位をN-30°Wに向ける。建替えによる建物規模の縮小には、縮小すべき条件の存在と、調査区外におよぶ柱間数の変更などの理由が考えられる。

建替え後の建物跡の柱は抜き取られ、人為的に埋め戻されている。柱掘形は方形を基本とし、黒褐色土と黄褐色土の混合土が充填されている。柱掘形を連結する溝は建て替え後の柱に付随するものである。覆土は建て替え後の柱抜き取り痕に人為的に埋め戻された土層とは分層することができず、柱抜き取りの際に同時に掘り返された可能性がある。

建替え前の建物跡の柱も建替え段階で抜き取られ、建替える前に一端埋め戻されている。柱掘形は隅丸方形を基本とし、黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が版築状に丁寧に衝き固められて充填されている。

遺物は図示し得ないが、須恵器甕片、土師器甕・坏片が出土している。

第3号掘立柱建物跡 (第590・581図)

梁行2間の側柱掘立柱建物跡で、桁行は3間と想定される。S19、T19グリッドに位置し、東半は調査区

第588図 H区第1号掘立柱建物跡出土遺物



H区第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第588図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕				W片	A	灰	5	P4 宋野産
2	甕	9.0	(2.9)		WB	A	灰	5	P1 関西産?
3	長頸甕		(8.0)		B	A	灰	10	P4 秋田産? 自然釉付着
4	坏	(9.9)	(3.1)		WB	A	褐灰	10	P4
5	坏	(11.2)	(2.8)		WR	A	赤褐	15	P1 赤彩

第2号掘立柱建物跡

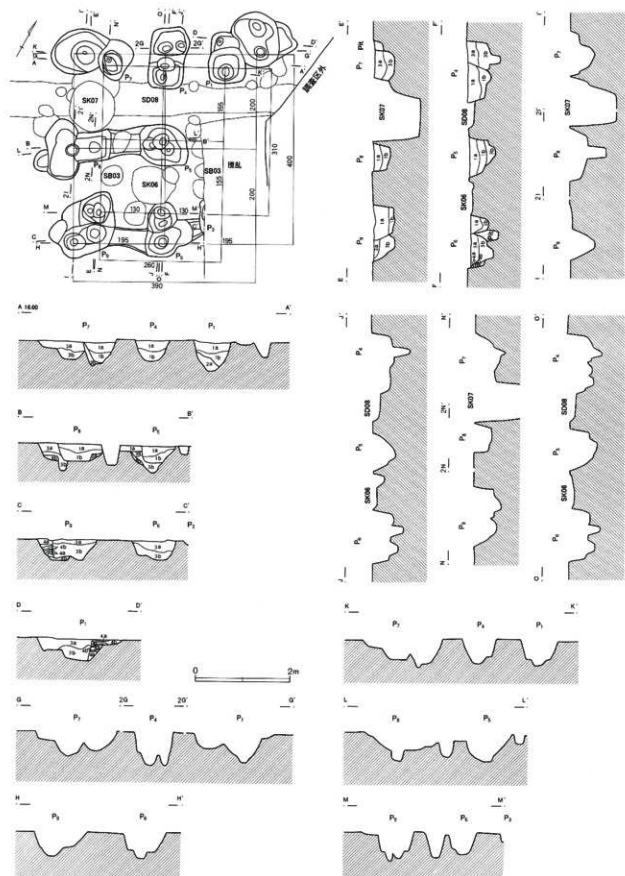
建替え後

- 柱抜き取後の人為的埋戻
 - 黒褐色土 黄褐色土7%多量
 - 黒褐色土 黄褐色土7%多量
- 柱掘形充填
 - 黒褐色土7%多量
 - 黒褐色土 黄褐色土7%少量 粘結

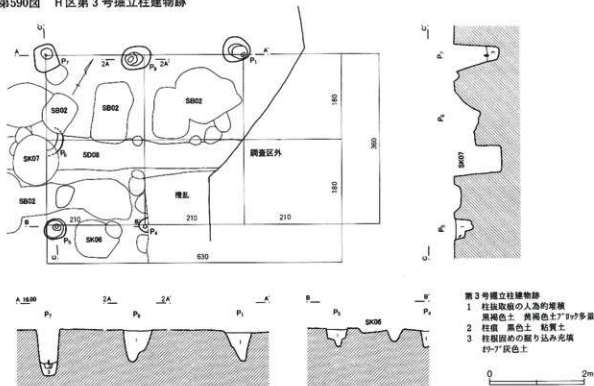
建替え前

- 柱抜き取後の人為的埋戻
 - 黒褐色土 黄褐色土7%多量
 - 黒褐色土 黄褐色土7%多量
- 柱掘形充填(灰充填)
 - 黒褐色土70%+黄褐色土7%多量
 - 黒褐色土7%多量+c黒黄褐色土70%

第589图 H区第2号掘立柱建物跡



第590図 H区第3号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡
 1 柱抜き取の人為的埋填
 黄褐色土・黄褐色土ブロック多量
 2 柱底 黒色土・粘質土
 3 柱根固めの廻り込み充填
 砂・ア灰色土

外にある。第2号掘立柱建物跡、第6・7号土塊、第8号溝跡と重複し、一部攪乱されている。

柱間は桁行2.10m、梁行1.80m、規模は梁行3.60m×桁行6.30m、面積22.68㎡と推定される。桁行は南北に面し、軸方位をN-30°-Wに向ける。

柱掘形は円形もしくは隅丸方形で、柱は抜き取られている。P7は柱痕の一部が残存し、放置された柱材も発見されている。柱根固めにオリーブ灰色土が充填されている。

遺物は図示し得ないが、土師器甕・坏片が出土している。

第5号掘立柱建物跡 (第591・581図)

X23・24、Y23・24グリッドに位置する桁行6間×梁行2間の総柱掘立柱建物跡で、D区第2号掘立柱建物跡(桁行3間×梁行2間・総柱)と報告された掘立柱建物跡と同一のものである。

柱間は桁行2.43m、梁行2.88m、規模は桁行14.60m×梁行5.92m、面積86.432㎡を測る。桁行は東西に面し、軸方位をN-13°-Wに向ける。

柱は抜き取られているが、P7・P14・P19には柱

痕の一部が残存している。柱掘形は不整形を基本とし、柱抜き取り痕が張り出しているものもある。黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が飯糰状に丁寧に衝き固められて充填されている。

東柱の柱掘形は側柱に比べて浅く、東立て床の貼られた上屋構造が推定される。

遺物は図示したほかに、須臾器甕・坏片、土師器甕・坏片が出土している。

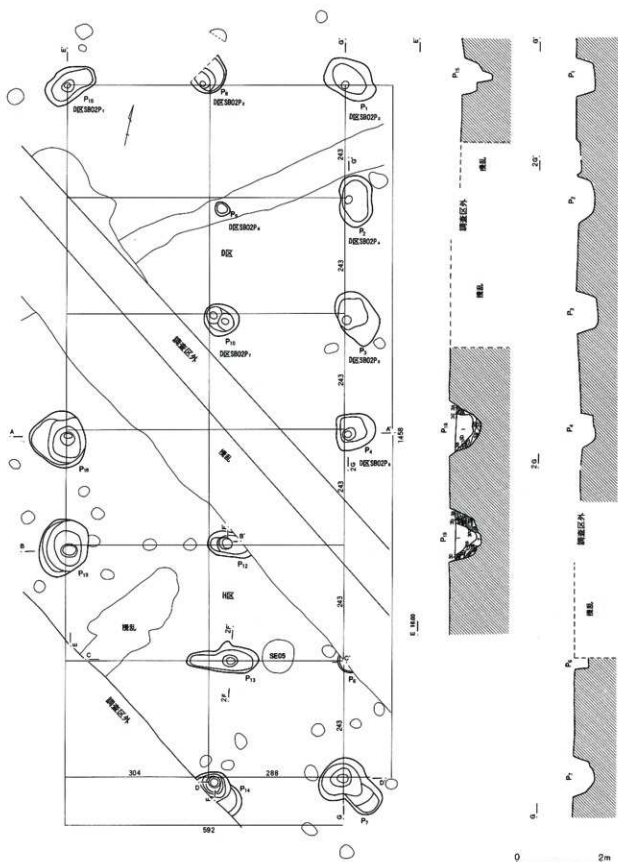
第4号掘立柱建物跡 (第592・581図)

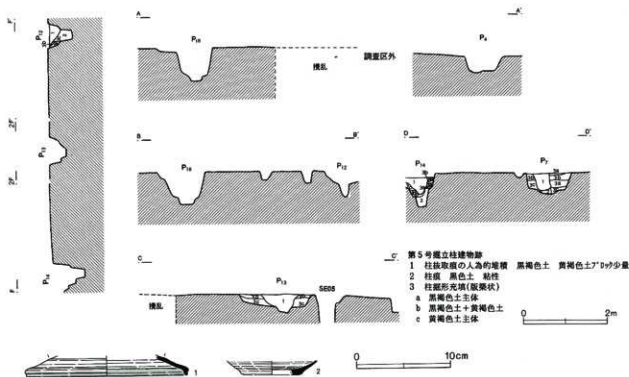
桁行4間×梁行2間と想定される側柱掘立柱建物跡で、南東半が調査区外にある。U19・20、V20グリッドに位置し、第2号住居跡、第2号柵列跡、第9号土塊と重複する。

柱間は桁行2.60m、梁行2.90m、規模は桁行10.40m×梁行5.80m、面積60.32㎡と推定される。桁行は東西に面し、軸方位をN-12°-Wに向ける。

柱は抜き取られて人為的に埋め戻されているが、P1・P2・P3・P4・P6には柱痕が残存している。柱が柱掘形底面にさらにピットを掘り込んで設置されていたため、根元から抜き取ることができずに途中で

第591图 H区第5号掘立柱建物跡・出土遺物





H区第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第591図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	16.9	(2.2)		WB針	A	灰	5	P 1 南比金産 自然釉付蓋
2	環		(1.5)	(6.4)	WB	A	灰	5	P 1 湖西産? 手持ちヘラ

H区第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第592図)

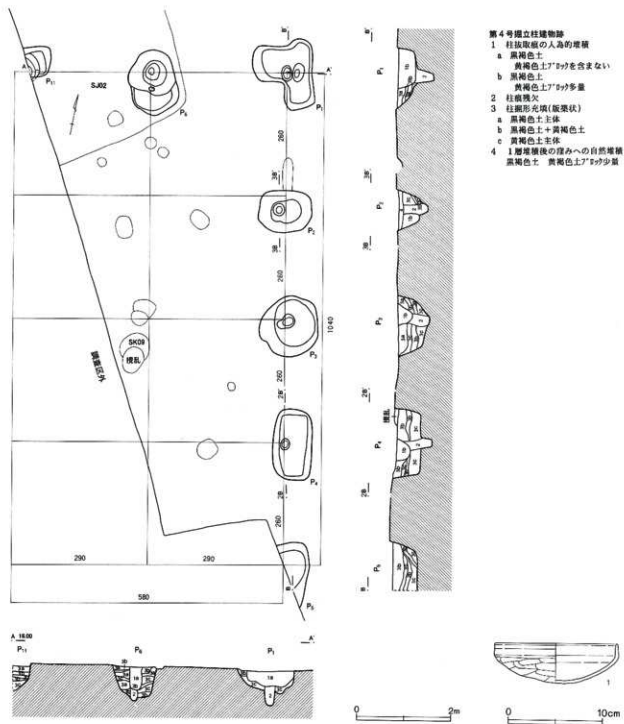
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.8	4.2		WB	A	にぶい赤褐	100	P 6

折などして、残欠は放置されたものと思われる。柱掘形は方形を基本とし、隅柱はL字形を呈している。一部に柱抜き取り痕が張り出すものもある。柱掘形への充填は、黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が版

築状に丁寧に衝き固められていった様子がみられる。

遺物は図示したほかに、須恵器甕・高環・環片、土師器甕・環片が出土している。

第592図 H区第4号掘立柱建物跡・出土遺物



3. 柵列跡

第1・2号柵列跡 (第593・581図)

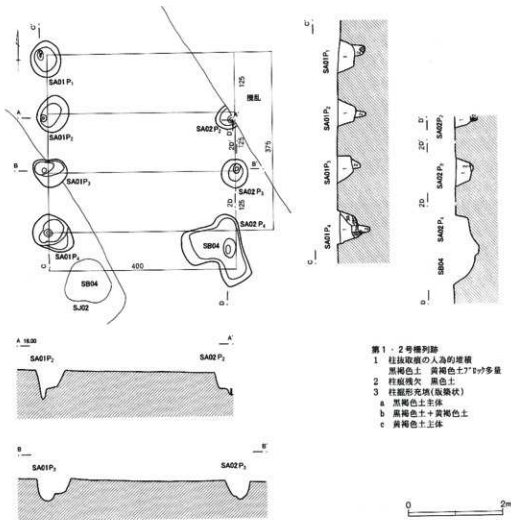
T19・20、U19・20グリッドに位置し、第2号住居跡、第4号掘立柱建物跡と重複する。2列が対になる柵列跡で、柱間1.25m、列距離3.75mを測る。列間の距離は4.00m、列方位はN-0.5°-Wを向いている。

柱は柱掘形底面にさらに掘り込まれたピットに柱根を差し込んで設置されている。廃棄段階には柱が抜き

取られているが、ピットに差し込まれた柱根部分は柱痕として残存している。このうち、第1号柵列跡P1・第2号柵列跡P2では柱材の残欠が発見されている。柱掘形は円形で、黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が版築状に丁寧に衝き固められて充填されている。

遺物は図示し得ないが、須恵器甕片、土師器甕・坏片が出土している。

第593図 H区第1・2号柵列跡



4. 土壌

発見された土壌は22基あり、遺構が比較的集中する第1・2号住居跡、第2・3号掘立柱建物跡周辺と、調査区南端に集中する傾向が窺われる。

平面規模は径1m前後のものが多く、方形もしくは円形の平面形態が殆どである。深さは0.2~0.3m前後が主体であるが、第5・7号土壌は1m強と深い。

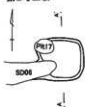
埋没状況は自然堆積と捉えられるものが多いが、第594図 H区土壌(1)

1・7・12号土壌は明らかに人為的に埋め戻されている。

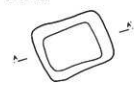
遺物は須恵器・土師器の小破片が殆どで、幸うじて、第3・12・21・22号土壌出土遺物が図示し得た。第3号土壌からは円面碗の破片が検出されている。

土壌の用途・性格については不明である。

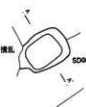
第2号土壌



第3号土壌



第4号土壌



第9号土壌



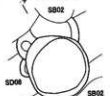
第5号土壌



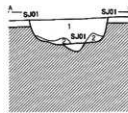
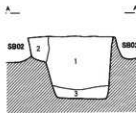
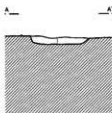
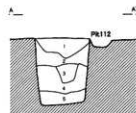
第6号土壌



第7号土壌



第8号土壌



0 2m

第2号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒(2~8mm)少量
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)多量

第5号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)若干
焼土粒・炭化物粒(2~5mm)少量
- 2 暗灰色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)多量
- 3 暗灰色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)多量
- 4 暗灰色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)多量
- 5 灰~黒色土 灰色土ア7p7(5~20mm)若干

第3号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)少量
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土ア7p7(5~30mm)多量

第6号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土・黄褐色土粒少量

第7号土壌

- 1 黒褐色土 人為的埋戻層 拳大~人頭大の黄褐色土ア7p7
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒少量
- 3 灰~黒色土 粘質土

第4号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)若干
焼土粒(2~5mm)少量

第9号土壌

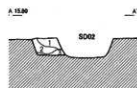
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒(2~5mm)少量
- 2 暗褐色土 黄褐色土ア7p7・粒(2~20mm)多量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒(2~10mm)少量
- 4 暗褐色土 黄褐色土粒・ア7p7(2~20mm)少量
- 5 灰黄褐色土 黄褐色土多量

第8号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 2 黒褐色土 黄褐色土ア7p7多量

第595図 H区土壌(2)

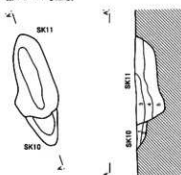
第1号土壌



第13号土壌



第10-11号土壌



第1号土壌

- 1 褐色土 黄褐色土粒(2mm)若干
- 2 褐色土 人為的堆積 黄褐色土^ア5φ(5~30mm)多量
- 3 灰黄褐色土 人為的堆積 黄褐色土^ア5φ(5~30mm)多量

第10-11号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土^ア5φ(5~30mm)少量
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土^ア5φ(5~30mm)多量

第11号土壌

- 3 黒褐色土 黄褐色土^ア5φ(5~25mm)多量
- 4 黒褐色土 黄褐色土^ア5φ(5~25mm)少量
- 5 灰黄褐色土 黄褐色土^ア5φ(5~50mm)多量

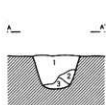
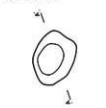
第12号土壌

- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒(2~5mm)少量
- 2 灰黄褐色土 人為的堆積 黄褐色土^ア多量
- 3 灰黄褐色土 人為的堆積 黄褐色土^ア5φ(5~30mm)多量

第13号土壌

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒少量

第12号土壌



H区土壌

番号	グリッド	遺構図	全体図	形状	長径m	短径m	深さm	重複遺構	出土遺物・その他
1	W21	595	S81	方	(0.60)	(0.49)	0.27	SD02	土師器装/坏
2	S19	594	S81	方	0.75	0.68	0.11	SD06 P17	
3	S19	594	S81	隅丸長方	1.15	0.86	0.23		須恵器装 土師器装/坏
4	T19	594	S81	方	0.75	0.58	0.30	SD08	
5	S19	594	S81	円	0.98	0.92	1.04	P112	土師器装
6	T19	594	S81	楕円	0.94	0.78	0.10	P66	土師器装
7	T19	594	S81	円	1.07	1.05	0.99	SD08	
8	T19	594	S81	不整	(1.17)	(0.67)	0.35	SJ01 P1/37	土師器装/坏/椀片
9	U20	594	S81	円	0.69	0.63	0.56		
10	V21	595	S81	楕円	(0.50)	(0.49)	0.16	SK11	須恵器坏 土師器装/坏
11	V21	595	S81	楕円	1.39	0.72	0.45	SK10	
12	V21	595	S81	楕円	0.79	0.63	0.53		須恵器装 土師器装/坏
13	X23	595	S81	不整	0.74	0.55	0.13	SD13	土師器装
14	欠番								
15	Z24/25	596	S81	不整	1.90	(0.35)	0.31		須恵器装 土師器装/坏
16	Y25 Z25	596	S81	不整	(1.25)	0.72	0.08		土師器装
17	Y24	596	S81	円	0.91	0.84	0.23		土師器装/坏
18	Y24	596	S81	楕円	1.07	0.74	1.28		土師器装/坏
19	Y24	596	S81	不整	0.74	0.46	0.28	SK20	須恵器装 土師器装
20	Y24	596	S81	円	1.08	0.94	0.15	SK21	土師器装
21	Y24/25	596	S81	不整	(2.33)	1.61	0.24	SK20	須恵器装 土師器坏
22	Y25 Z25	596	S81	楕円	1.34	1.02	0.18		土師器装/坏
23	Y24	596	S81	不整	1.94	1.94	0.08		土師器装/坏

第596图 H区土壤(3)

第15号土壤



A—A'



第16号土壤



A—A'



第17号土壤



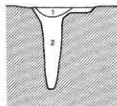
A—A'



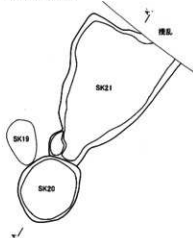
第18号土壤



A—A'



第20·21号土壤



A—A'



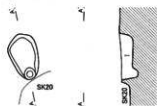
第22号土壤



A—A'



第19号土壤



第23号土壤



A—A'



第15号土壤

- 1 黑 色 土 黄褐色土粒多量
- 2 黑褐色土 黄褐色土7"以上多量

第16号土壤

- 1 黑褐色土 黄褐色土7"以上多量

第17号土壤

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒少量
- 2 黑褐色土 黄褐色土7"以上多量

第18号土壤

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒少量
- 2 黑褐色土

第19号土壤

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒·7"以上多量

第20·21号土壤

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒微量

第21号土壤

- 2 黑褐色土 黄褐色土粒少量

第22号土壤

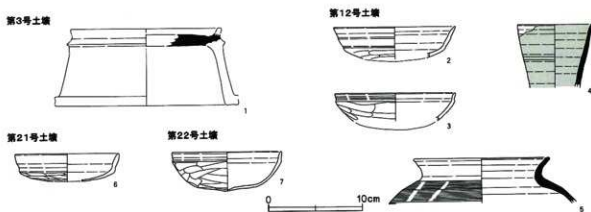
- 1 黑褐色土 黄褐色土粒微量 炭化物少量

1 層底部に深く埋積

- 2 黑褐色土 黄褐色土7"以上少量

0 2m

第597図 H区土壙出土遺物



H区土壙出土遺物観察表 (第597図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円面碗		(1.3)		WB 針	A	灰	10	SK03 南比企産
2	環	(12.8)	(3.4)		WB	A	明褐灰	5	SK12
3	環	(12.6)	(3.0)		WB	A	にぶい褐	5	SK12
4	長頸壺	(7.8)	(6.7)		WB	A	灰	5	SK12 末野産? 自然軸付着
5	小型甕	(14.2)	(4.7)		WB 片	A	灰	5	SK12 末野産
6	環	(10.8)	(3.9)		WR	A	明赤褐灰	30	SK21
7	環	(11.5)	3.7		WB	A	にぶい赤褐	30	SK22

5. 井戸跡

発見された井戸跡は9井あり、住居跡・獨立柱建物跡周辺に分布しているが、隣接するこれらの遺構との時間的な関係は明確ではない。

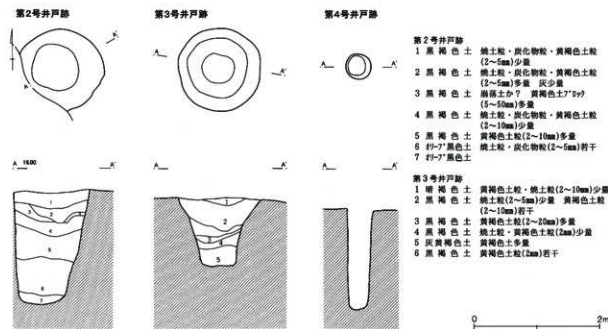
平面規模から径1.3m前後、径0.6~0.8m前後、径0.4m以下に分けられる。第2号井戸跡は第2号住居跡と重複し、新旧関係は新しい。

埋没状況は、第7・9号井戸跡が明らかに人為的に

埋め戻されている。第10号井戸跡は攪乱が著しく、崩落の危険性が高いため、井戸跡であることを確認して調査を終了した。

遺物は少なく、第3・7号井戸跡出土遺物が図示した。第7号井戸跡からは胴部上半から口縁部にかかる土師器甕と曲物の底板が出土している。

第598図 H区井戸跡(1)



H区井戸跡

番号	グリッド	遺構図	全体図	形状	長径m	短径m	深さm	重複	遺構	出土遺物・その他
1	欠番									
2	T19		598	581	円	1.31	(1.21)	1.69		須恵器甕/蓋 土師器甕
3	V20		598	581	円	1.34	1.32	1.09		須恵器甕/環 土師器甕/環
4	U20		598	581	円	0.41	0.40	1.61		土師器甕/環
5	Y24		599	581	円	0.73	0.70	1.56		須恵器甕 土師器甕/環
6	Y24/25		600	581	不整形円	0.78	0.70	1.00		須恵器環 土師器甕
7	X22		599	581	円	0.85	0.80	1.44	SE08	須恵器甕/環 土師器甕/環
8	X22		599	581	円	0.35	0.33	1.10	SE07	土師器甕
9	X22		599	581	円	0.57	0.56	1.18	SD13	須恵器甕 土師器甕

H区井戸跡出土遺物観察表(第601図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	10.8 (11.6)	(3.9)	(4.8)	WBR	A	にぶい赤褐	45	SE03
2	環				W	A	にぶい赤褐	10	SE04
3	甕				WB針	A	灰	5	SE07 南北企産 自然釉付着
4	甕	23.4	(15.1)		WR	A	褐灰	30	SE07 No.1
5	曲物の底板								SE07 No.3 長さ10.1×幅14.6×厚さ0.5

第599图 H区井尸迹(2)

第6号井尸迹



A 1120

A'

第7号井尸迹



A

A'

第8号井尸迹



A

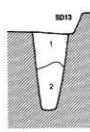
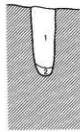
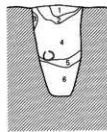
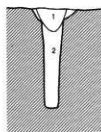
A'

第9号井尸迹



A

A'



第5号井尸迹

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒·烧土粒少量
- 2 黑色土 粘质土



第7号井尸迹

- 1 黑褐色土 人为的堆填 炭化物粒·烧土粒少量
- 2 黑褐色土 人为的堆填 炭化物少量 烧土粒少量
- 3 黑色土 壁崩落土 黄褐色土7"多量
- 4 黑色土 烧土粒·炭化物少量
- 5 黑褐色土 壁崩落 黄褐色土7"多量
- 6 黑色土 粘质土

第8号井尸迹

- 1 黑褐色土 黄褐色土7"多量
- 2 褐色土 壁崩落土

第9号井尸迹

- 1 黑褐色土 人为的堆填 灰黄褐色土7"多量
- 2 黑色土 粘质土

第600图 H区井尸迹(3)

第6号井尸迹

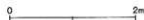


A 1120

A'

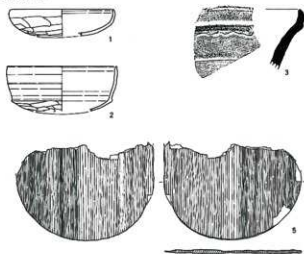
第6号井尸迹

- 1 黑褐色土 黄褐色土粒少量 炭化物少量
- 2 黑色土 中砂质

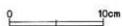
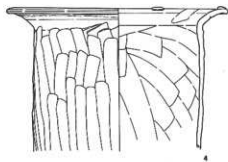


第601图 H区井戸跡出土遺物

第3号井戸跡



第7号井戸跡



6. 溝跡

発見された溝は14条である。

第2・3号溝跡はA・B・C・D・G区と同様の自然堤防に対して直交方向に走る中世段階の区画溝である。第2号溝跡はD区第5号溝跡・C区第77号溝跡と対応し、第3号溝跡はD区第4号溝跡・C区第77号溝跡と対応する。

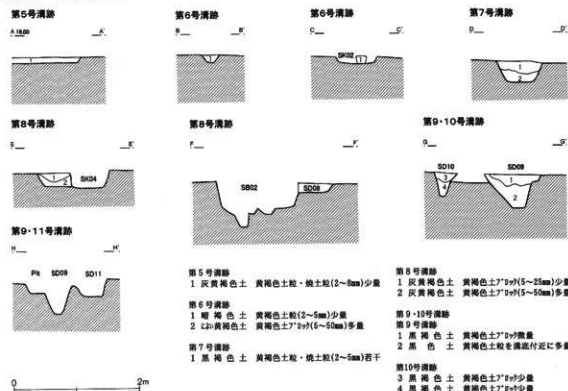
第8号溝跡はD区第13号溝跡・G区第36号溝跡に対応する。D区でクランク状に屈曲する溝跡で、用途・

性格は不明である。

第13・14号溝跡はD区第2・14号溝跡、D区第8・11号溝跡に繋がる溝跡である。直角に屈曲し、自然堤防に対して直交方向に走るH区第2号溝跡・D区第5号溝跡、H区第3号溝跡・D区第4号溝跡と直交する。

出土遺物は少なく、第1号溝跡から7世紀代の須恵器環・土師器環、第3号溝跡から常滑甕、第14号溝跡から須恵器壺口縁部・土師器小型甕が出土している。

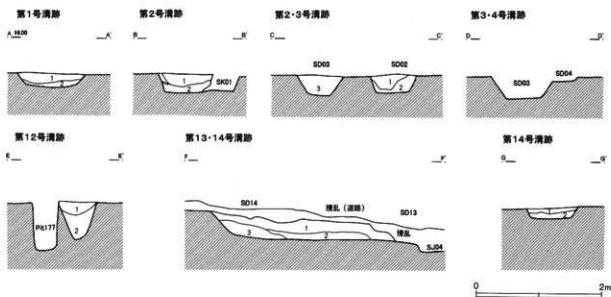
第602図 H区溝跡(1)



H区溝跡

番号	グリッド	幅 (m)	深さ (m)	走行方位	出土遺物・その他
1	W21	0.99~1.08	0.16~0.22	N-58.5°-E	須恵器環 土師器甕/環
2	W21/22	0.72~0.79	0.26~0.30	N-67°-E	土師器甕
3	W21/22	0.74~0.83	0.33~0.41	N-72.5°-E	須恵器甕/長頸瓶 土師器甕/環 中世陶器
4	W22	0.42	0.06	N-59°-E	須恵器環 土師器甕
5	S18/19	(1.10)	0.08~0.09	N-56°-E	土師器甕/環
6	S18/19	0.26~0.38	0.09~0.12	N-87°-W	土師器甕/環
7	S19	0.48~0.81	0.26~0.36	N-43.5°-E/N-42°-E	土師器甕/環
8	S19 T19	0.52~0.88	0.12~0.20	N-61.5°-E	須恵器甕/環 土師器甕/環
9	S19	0.82	0.39	N-75°-E	須恵器環 土師器甕/環
10	S19	0.28	0.22~0.37	N-68°-E	土師器甕/環
11	S19	0.32~0.52	0.14~0.28	N-53°-E	須恵器環 土師器甕
12	W22 X22	0.36~0.65	0.21~0.52	N-66°-E	須恵器環 土師器甕/環
13	W22 X22/23	1.00	(0.27)	N-22°-W	須恵器甕 土師器甕/環/高環
14	X23	0.78~1.48	0.12~0.32	N-57.5°-E	須恵器甕/高環 土師器甕/環/甕

第603图 H区溝跡(2)



第1号溝跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)若干
2 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量

第2・3号溝跡

- 第2号溝跡
1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒(2mm)若干
2 黒褐色土 黄褐色土?砂(5~10mm)焼土粒・炭化物粒(2~5mm)若干

第3号溝跡

- 3 黒褐色土 黄褐色土粒が溝底部に散在

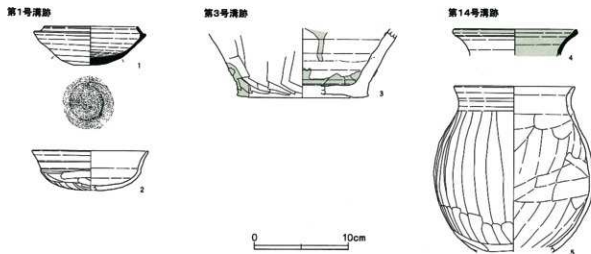
第12号溝跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒少量
2 黒褐色土 黄褐色土粒・?砂多量

第13-14号溝跡

- 1 黒褐色土 焼土粒・黄褐色土粒少量
2 黄褐色土 黒褐色土?砂主体 黒褐色土
3 黒色土 黄褐色土粒・炭化物粒

第604图 H区溝跡出土遺物



H区溝跡出土遺物観察表(第604图)

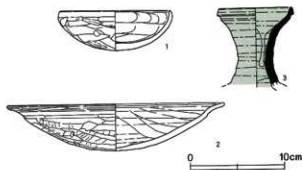
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	环	9.9	4.1		W針	A	暗青灰	95	SD01・02 南北企産 底部全面へラ
2	环	(12.2)	(4.2)		BR	A	にぶい橙	40	SD01 No.1
3	甕		(7.4)	(13.9)	WBR	A	暗褐	5	SD03 常滑 自然軸付着 内面底部に軸腹
4	壺	(12.8)	(2.7)		WB	A	灰	5	SD14 秋間産? 自然軸付着
5	小型壺	(12.7)	(17.5)		WB片	A	にぶい橙	60	SD14

7. その他の遺物

(1) 表採遺物

第605図に図示した遺物は、H区南東に流れる千間堀水路左岸土手部から採集された遺物である。狭義的にはH区出土遺物ではないが、H区と接した位置関係にあることから、H区表採遺物として掲載する。

第605図 H区表採遺物



H区表採遺物観察表 (第605図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.7	4.2		WR	A	にぶい橙	75	表採 千間堀東岸
2	坏	(23.1)	5.0		WR	A	橙	25	表採 千間堀東岸
3	長頸瓶	7.7	(8.4)		W	A	黄灰	5	表採 千間堀東岸 内外面とも全面に自然釉付着

VIII まとめ

築道下遺跡は、元荒川左岸に沿って延びる自然堤防上に立地している。その範囲は長さ約800m、幅80～250mの範囲におよび、このうち約64,300㎡を対象に発掘調査が実施された。発見された遺構は古墳時代後期から中・近世にわたる。住居跡789軒、掘立柱建物跡238棟、欄列跡30列、土壇1,254基、井戸跡572井、溝跡429条、茶臼跡20基、墓壇1基、性格不明遺構20基、墓地跡1カ所、土器焼成窯1基、周溝状遺構1基、ピット多数を数え、住居跡・掘立柱建物跡は県内屈指の軒数・棟数を誇る。中世の元荒川の氾濫・浸食や、千間

1. 集落の展開

分割される2つの居住域

789軒を数える住居跡軒数は遺跡の特徴の1つにあげられるが、住居跡が激しく重複し、また時期差がきわめて短いことも特徴といえる。これは自然堤防上に所在する立地条件のもと、限られた居住スペースに続々と住居跡が建て替えられた結果として捉えられる。

住居跡は、ほぼ遺跡全域にわたって発見されている。その分布状況を見ると、調査上便宜的に分割したC区とF区の境界付近(AV～BBグリッド)にきわめて希薄な区域が認められる(付図)。この付近は、立地する自然堤防が最も狭まる箇所にあたり、住居跡の分布には自然地形が反映されている。しかし、住居跡の重複を幾度も繰り返しながら展開された築道下遺跡において、奇異な空間として捉えられる。このような住居跡の分布から、境界線は明確には引けなが、A・B・C・D・G・H区におよぶ住居跡群(591± α 軒)とE・F区にわたる住居跡群(198± α 軒)に分割することができる。

A・B・C・D・G・H区住居跡群とE・F区住居跡群の調査区上の面積は遜色ないが、元荒川を軸とする分布距離には格段の差が認められる。ここで注目されるのが、ハッ島遺跡の存在である(山本1998)。ハッ

堀水路などの後世の開削を免れていたならば、さらに相当な遺構数が増える巨大な集落遺跡である。

築道下遺跡の発掘調査の成果は、『築道下遺跡I』(吉田1997)、『築道下遺跡II』(大屋・栗岡1998)、『築道下遺跡III』(飯持2000)として、A・B・C・D区の報告がなされている。本書の対象とする区域はE・F・G・H区の4区で、調査面積は約32,550㎡におよんでいる。各区の位置関係は第3図に示したが、G・H区が遺跡北西部に位置し、E・F区は遺跡南東半に広がっている。

島遺跡は人工建物である一般国道17号(熊谷バイパス)を挟んだ東側に隣接して所在し、築道下遺跡と同一の自然堤防上に立地している。遺跡の立地条件をふまえながらE・F区とハッ島遺跡の遺構の分布状況を見ると、両者の間に遺構分布域の境界を設定することは難しく、本来、同一の遺跡であったものと捉えられる。E・F区西端からハッ島遺跡東端までの距離はA・B・C・D・G・H区の距離に匹敵し、自然堤防に沿って延びる築道下～ハッ島遺跡には、2つの住居跡群の存在が想定される。ハッ島遺跡から検出された住居跡は30軒余りで、E・F区～ハッ島住居跡群は300軒を超えない程度と予想される。住居跡が密集するA・B・C・D・G・H区住居跡群に対し、軒数の半数ほどに留まるE・F区住居跡は、分布密度が薄く、対照的である。

次に、築道下遺跡の特徴として、掘立柱建物跡の棟数の多さもあげられる。掘立柱建物跡は古代から中世にかけて建立されたもので、A区7棟、B・C区118棟、D区7棟、E区3棟、F区89棟、G区9棟、H区5棟が発見され、これにハッ島遺跡の1棟も加えると合計239棟を数える。また柱痕や柱抜取痕が明瞭に確認できるピットが多数存在し、配置の規則性や組み合わせを把握することはできなかったものの、建物跡の存在が

想定される。これを含めると、さらに掘立柱建物跡棟数が増加することが予想される。

築道下・ハッ島遺跡から発見された住居跡軒数と掘立柱建物跡棟数を比較すると、住居跡に対し掘立柱建物跡は29%、住居跡+掘立柱建物跡をあわせた建築物に対する掘立柱建物跡の割合は22%を占める。また古代に限定するならば、掘立柱建物跡の割合は相当数にのぼる。掘立柱建物跡棟数の多さに加え、住居跡に対する割合の高さも築道下遺跡の特徴の1つとなっている。

さて、住居跡はAV～BBグリッド付近の希薄な分布域の存在から、A・B・C・D・G・H区住居跡群とE・F区～ハッ島住居跡群に分割される。第606～608図に示した掘立柱建物跡の分布には、AO24グリッド～AX33グリッドにおよぶ直線距離約120m、古代に限定すると、AZ38グリッド～BE35グリッドまでの約170mにおよぶ空白地域が存在している。やはり掘立柱建物跡も、A・B・C・D・G・H区(146棟)とE・F区～ハッ島(93棟)に分布する掘立柱建物跡群に分割され、その住居跡群とは異なる境界は明瞭である。

以上のように、築道下・ハッ島遺跡の住居跡・掘立柱建物跡の分布状況から、それぞれ2つの住居跡群・掘立柱建物跡群に分割することができ、その範囲もほぼ合致している。そこで、住居跡・掘立柱建物跡を中心としたA・B・C・D・G・H区居住域とE・F区～ハッ島居住域の存在が認められる。2つの居住域の存在の要因として、立地する自然地形を反映していることが想定される。しかし、その境界は不明瞭で、一部には重複していることも推測されるため、分割される2つの居住域を異なる集落遺跡として捉えることができず、巨大集落遺跡に内包される2つの居住域の歴史的動向を検討する必要がある。

G・H区の住居跡

G・H区は、A・B・C・D・G・H区住居跡群の北東側外辺部に位置し、合計24軒の住居跡が発見されている。住居跡が発見されていないD区の南西に接するH区は、A・B・C・D・G・H区住居跡群の北東

端にあたる。また住居跡の分布が希薄なG区北西半は、A・B・C・D・G・H区住居跡群北東際付近にあたるが、B・C区とA区の間位置するG区南東半は、住居跡の重複も著しい。

G・H区は道路築造工事に伴う調査区で、全容を把握できる住居跡が少ない。また既存の道路建設によって擾乱を受け、遺構の残存状態がきわめて悪い。さらにG区では住居跡の重複が著しく、住居跡の各要素を抽出することは困難である。住居跡24軒のうち半数以上は図示できる遺物がなく、図示可能な遺物を出土した住居跡も出土量は極端に少ない。このような状況から推定された年代には、不確定な要素が多分に含まれている。そこで、G・H区のみ調査成果から、591± α 軒におよぶ住居跡群にアプローチすることには無理がある。

吉田稔は『築道下遺跡I』のなかで、6世紀初頭から8世紀前半におよぶ築道下遺跡B区の集落変遷を、概ね半世紀単位に第I～V期と段階付け、さらに各期を前半・後半の2段階に細分して捉えている。これは600軒近くにおよぶ住居跡群の約1/6を対象とした区分で、各期の2段階細分も不明瞭である。しかし、資料が絶対的に不足しているG・H区の調査成果から、新たな時期区分を導き出すことは不可能で、地点的に近接することを重視し、また吉田案に検討の余地が残されていることを念頭におきながら、この集落変遷のなかにG・H区の住居跡を位置づけておく。

G・H区の住居跡のなかで、G区第15号住居跡が最も古く位置づけられ、第I期後半段階に相当する。次に、G区第7号住居跡があげられる。出土した土師器高環は第I期から第II期にかかる頃と思われる。続く、H区第2号住居跡は第II期後半代に位置づけられよう。

第III期段階の住居跡として、G区第3・5・6号住居跡があげられ、第6号住居跡は第5号住居跡よりも後出的である。第IV期にはG区第10・17・18・19号住居跡があげられる。出土した土師器環は、鬼高系模倣環系譜と、いわゆる北武藏型環が伴っている。

B・C区の調査成果において、住居跡は8世紀第1四半期頃までを限度に変遷とするものと捉えられているが、G区第12号住居跡は8世紀末頃の須恵器碗片が出土し、年代的に釧路が認められる。G区第12号住居跡は遺物量がきわめて少なく、他の遺構との重複も著しい。後世に流れ込んだ遺物として捉えることも否定できず、時期特定は困難である。その一方で、8世紀末頃に至る集落の継続を証明する資料ともなる可能性も残されている。

以上のように、G・H区の住居跡は、B区の集落変遷のなかで概ね捉えることができる。ただし、遺構・遺物の検出状況から、不確定要素が多分につきまわっている。

G・H区の掘立柱建物跡

A・B・C・D・G・H区に所在する掘立柱建物跡は、合計146棟を数える。G・H区の掘立柱建物跡はA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群の北東側外辺部に位置し、G区9棟、H区5棟が発見されている。H区第5号掘立柱建物跡は、D区第2号掘立柱建物跡と同一の建物跡である。

G・H区の掘立柱建物跡も、限られた調査区や削平などの影響によって、全容を把握できるものが少ない。また柱掘形のみが検出されるにすぎないという遺構のもつ性格上、遺物出土量がきわめて少ない。さらに、柱痕・柱抜取痕から出土した遺物がその掘立柱建物跡の下限を、柱掘形から検出された遺物はその上限の時期を示すという遺物出土位置による取り扱い方の違いもある。加えて、重複遺構が存在するときは、出土遺物がその掘立柱建物跡の時期を特定し得る資料とも限らない。そのため、推定された年代観には想像を超える不確定要素を含んでいる。

G・H区の掘立柱建物跡のなかで、時期が推定されるのは5棟にすぎない。最も古いのが、G区第9号掘立柱建物跡である。3間×2間と推定される総柱建物跡で、東立て床貼りの可能性がある。7世紀中葉を上限とするが、住居跡との重複が著しく、不確定な面が強い。

次に、G区第1号掘立柱建物跡・H区第1号掘立柱建物跡があげられ、7世紀末～8世紀初頭を上限とする。G区第1号掘立柱建物跡は3間×2間と推定される総柱建物跡、H区第1号掘立柱建物跡は4間×2間と推定される側柱建物跡である。

続いて、H区第4号掘立柱建物跡が8世紀前葉を上限とし、重複するH区第2号住居跡との新旧関係に釧路がみられない。4間×2間と推定される側柱建物跡である。北西隅柱がH区第2号構列跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

最後は、H区第5号掘立柱建物跡(D区第2号掘立柱建物跡)である。6間×2間、東立て床貼りの総柱建物跡である。9世紀中葉を上限とし、住居跡群の終焉時期と大きな隔たりが認められるが、G区第12号住居跡が8世紀末頃に位置づけられる可能性も残されている。A・B・C・D・G・H区居住域において、9世紀代に至っても掘立柱建物跡が建立され続けていたものと解釈できる。

A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群

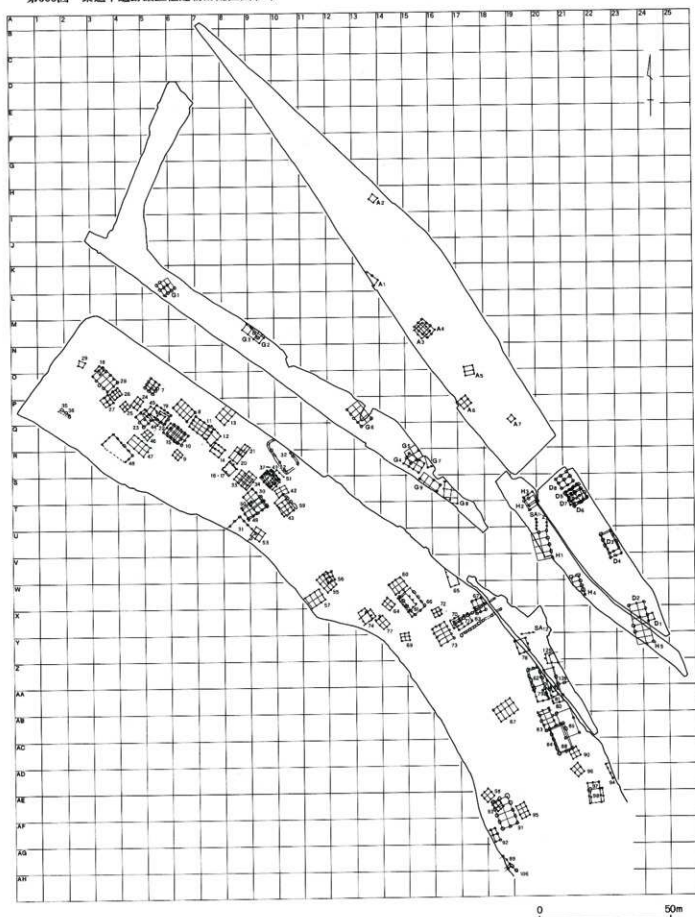
一括したA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群の掘立柱建物跡の分布をみると、いくつかの区域に集中する傾向が窺われる。栗岡間は「築道下遺跡II」のなかで、A・B・D区およびC区西半の掘立柱建物跡の分布状況を4群に区分しているが、新たに、C区東半とG・H区も加えて集中区域の区分を試みておく必要がある。

第606・607図は、「築道下遺跡II」に掲載された第616図掘立柱建物跡全体図に加筆したものである。この図から7カ所の集中区域に区分できる。

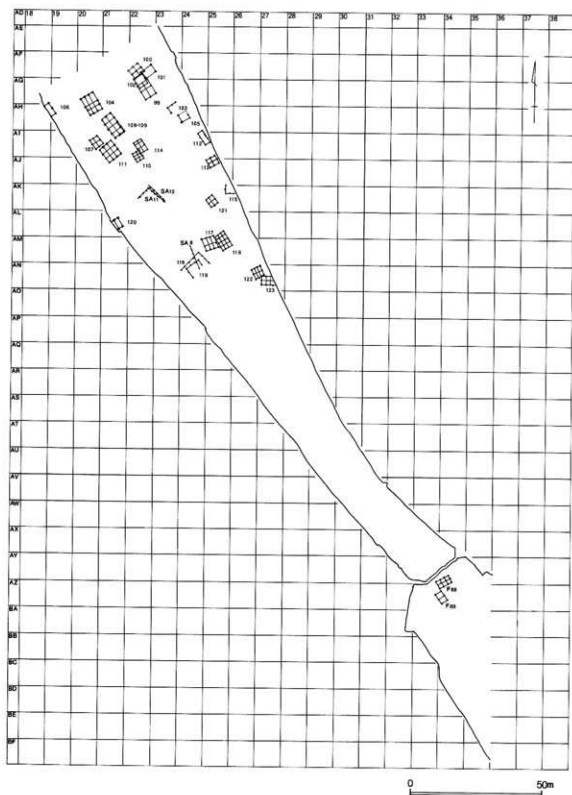
1つは栗岡がI群とした区域で、N-U-1~10グリッドに分布する掘立柱建物跡群である。第7・31・33~48・50~53・59号掘立柱建物跡の46棟が集中し、密集度が高い。この一群は、元荒川側に面したF字形に建物跡が配列されているが、建物跡の軸方位は東西二分され、異なるコの字配列の建物群が重複している可能性も考えられる。

次はA区西半からG区の西半に跨る区域で、H~M

第606図 築道下遺跡掘立柱建物跡配置図(1)



第607図 築道下遺跡掘立柱建物跡配置図(2)



—5—13グリッドに分布する。A区第1・2号掘立柱建物跡、G区第1～3号掘立柱建物跡の5棟があげられ、密集度はきわめて粗い。建物跡配列の規則性は不明である。

続いて、A区東半からG区東半、B区の一部に広がる区域で、M—S—9—18グリッドに分布する。A区第3～7号掘立柱建物跡、G区4～9号掘立柱建物跡、第32号掘立柱建物跡の12棟がある。建物跡の配列の規則性は不明である。第32号掘立柱建物跡は、唯一、布掘工法が用いられた建物跡である。

栗岡がII群とした区域は南北に分割される。その南側のV—Y—11—18グリッドが1群となり、第55～57・60・61・63～67・69～74・77号掘立柱建物跡の17棟が分布している。桁行11間と推定される第63号掘立柱建物跡が含まれている。建物跡が3列に並んだ状態がみられるが、規則性は見いだせない。

栗岡がII群とした区域の北側とIV群とした区域は一括され、D区、H区およびC区のS—AE—19—24グリッドに広がっている。D区第1・3～8号掘立柱建物跡、H区第1～5号掘立柱建物跡、第62・78～85・88・90・94・96・97・98・125・126号掘立柱建物跡の29棟が分布している。5間×2間側柱建物跡の第88号掘立柱建物跡や6間×2間側柱建物跡のH区第5号掘立柱建物跡がみられる。建物跡の配列の規則性は不明である。

AE—AH—17—19グリッドには狭い区域の一群がみられ、第58・89・91～93・95・106号掘立柱建物跡の7棟が分布している。建物跡の配列の規則性は不明である。

最後に、AF—AN—20—27グリッドに分布する一群で、第100～103・105～107・108—109・110～113・115・117・121～123号掘立柱建物跡の17棟があげられる。元荒川側を正面と捉えたコの字配列の傾向が窺われる。

以上のように、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群には7カ所の集中区域に区分でき、なかには建物跡配列の規則性が窺われる区域もみられる。しかし、

区分される集中区域は、あくまでも分布状況から捉えられる傾向にすぎず、個々の建物跡の時期推定等を行っている。また掘立柱建物跡の配列の規則性を考える場合、建物跡の時期推定を行う上で出土遺物や重複遺構との相対年代とともに重要な要素となり、建物跡の形状・規模、柱間寸法などの規格や方位の同一性などの検討が必要である。

なかでも方位は、掘立柱建物跡群を観察する上で、ビジュアルな重要要素である。多くの遺跡報告書で方位は、主軸方位として取り扱われている。主軸とするからには当然、建物の正面を想定した方位が計測されるべきである。建物正面の設定には、建物配列における個々の建物跡の位置や、屋蓋をも含めた上層構造の復元と出入口部の推定が不可欠である。しかし多くの場合、これらの作業を行わずに、長軸方向の方位＝主軸方位となっており、提示された数値を主軸方位として受容することには抵抗感がある。また、建物配列を観察する場合には「軸が並ぶ」と表現し、決して「主軸方位が一致する」とは用いない。現状において、掘立柱建物跡における主軸方位は、きわめて曖昧な数値である。栗岡は「N—〇〇—EもしくはWとそれに直交する」とし、曖昧さに一歩踏み込んだ表現を行っている。掘立柱建物跡は、幾何学上の長方形・正方形に柱掘形が並ぶという仮定の上に成立する遺構であり、建物設計もこれを基本としている。また建物配列にも幾何学性を期待し、その観察には軸並びを重視している。本書では、建物の軸並びを重視する視点を数値として表す方法を試し、掘立柱建物跡の長軸・短軸に関わらず、座標北を基点に東西へ偏する最低角度を「軸方位」と表現した。結果として、計測される数値は、N—45—WからN—45—Eまでの90°の範囲に収まってしまう。建物配列における「軸の一致」・「軸が並ぶ」という表現は、数値を根拠に「軸方位の一致」・「軸方位の近似」と明示することができる。ただし、両極端な数値であるN—45—WとN—45—Eは同一の値で、その前後の数値同志は近似した方位を示し、数値で表現しきれない矛盾もある。軸方位の試行には、再

考を要する。

区分された集中区域ごとの掘立柱建物跡の軸方位には、限定的な統一性を窺うことはできない。この軸方位の違いを、集中区域内に限られる、個々の掘立柱建物跡の時期差と関連づけて推測することは可能である。しかし、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群全体の掘立柱建物跡を、軸方位の違いによって時期区分することはできないであろう。区分された集中区域の範囲は立地する自然地形を反映し、その範囲内に展開する掘立柱建物跡は、元荒川を意識している。一部に建物跡配列が企画された集中区域もみられるが、その集中区域自体も自然地形の影響を色濃く受けている。

E・F区～ハッ島住居跡群

E・F区～ハッ島に所在する住居跡は232+ α 軒である。A・B・C・D・G・H区住居跡群に比べて軒数が少なく、基本的に分布密度が薄い。一方で、いくつかの密集箇所も認められている。例えば、第178・179・180・187・196号住居跡は7世紀末～8世紀中葉に、第181・182・183・184・186号住居跡は8世紀第1四半期を中心とする時期に、第190・191・192・193・194・195号住居跡は7世紀末から8世紀初頭・8世紀後半・9世紀前半を中心とする時期に、重複が繰り返されている。

ハッ島遺跡の成果において、住居跡の平面形態によってカマド設置壁が異なり、平面形態と主軸方位に相関する規則性を認められている。しかし、平面形態の相違が分布や配置、時間的な前後関係と対応しないことから、平面形態と主軸方位に相関する規則性は住居跡の質的相違として捉えられない。また平面形態の異なる住居を構築する選択基準なども想定できない。さらに、カマドの位置を度外視した方形プランの方向性に着目すると、一定方向に集中する傾向が窺われることから、集落は自然地形を受容しながら展開されたものと推定されている。

ハッ島遺跡と同様に、E・F区の住居跡にも正方形・長方形の平面形態が共存している。ここで方形プラン

の方向性を、掘立柱建物跡にならって座標北を基点に東西へ偏する最低角度を「軸方位」とすると、N-19-23-EとN-27-31-E間を除いて、満遍なく認められている。つまり、E・F区の住居跡においては、ハッ島遺跡のような平面形態と方位の相関する規則性は存在しない。E・F区の住居跡も、ハッ島遺跡と同様に、自然地形を受容しながら展開していったものと推測すると、この軸方位の数値のばらつきは立地する自然地形に起因するものと思われる。築道下・ハッ島遺跡の立地する自然堤防は、F区において二叉に分かれるとともに、F区からハッ島遺跡に向かって大きな弧を描きながら繋がっている。住居構築の際に、複雑な状況を示す自然地形を反映し、軸方位が定まったものと推定される。そこで、ハッ島遺跡において認められた住居跡の平面形態と主軸方位に相関する規則性は、単に自然堤防が一定方向に延びる立地条件を反映した偶発的な傾向にすぎず、そのために、質的相違や平面形態の選択基準などが捉えられなかったものと想定される。

E・F区の住居跡は、古墳時代末から平安時代にわたり、一方、ハッ島遺跡の住居跡は8・9世紀に展開している。分布とともに時期的にも、同一の住居跡群として捉えることができる。

E・F区の住居跡のなかで、最も古く位置づけられるのはF区第174号住居跡で、6世紀後葉頃と思われる。6世紀代まで遡る住居跡は、これ以外に認められていない。

7世紀になると、本格的な集落展開が開始される。F区第99・119・136号住居跡が7世紀初頭頃に、F区第106・129・131・140・150・172号住居跡が7世紀前半に位置づけられよう。若干遅れて、F区第73号住居跡が後続する。

次に、F区31・35・90・94・118・123・128・132・133・176号住居跡があげられ、7世紀中葉と思われる。またF区第72・95・163号住居跡は後出的な一群で、いわゆる北武蔵型系の土師器塚が出土している。

続く、F区第44・46・61・86・130・135・143・148・

151・161号住居跡は、7世紀後葉と捉えられる。

7世紀末～8世紀初頭頃には、ハッ島でも住居跡の構築が開始される。この時期の住居跡として、F区第62・137・154・170・198・201号住居跡、ハッ島第3・13号住居跡などがあげられる。

8世紀になると、E区第1号住居跡、F区第50・56・57・63・75・93・96・100・114・115・165・189・199・202号住居跡が8世紀前葉に位置づけられよう。またF区第8・9・10号住居跡とF区第181・182・183・184・186号住居跡は8世紀第1四半期を中心に、F区第166・168・169号住居跡は8世紀前半代に重複が繰り返されている。ハッ島第1・8～9・18号住居跡も8世紀前半代に捉えられている。

次の8世紀中葉には、F区第16・20・53・80・155—156号住居跡があげられる。これにF区第2・28・41・45・51・55・58号住居跡が先行し、F区第4・23・27・29・38・79・97・108・142号住居跡とハッ島第22号住居跡は後出する。またF区第5・6・7号住居跡が8世紀第3四半期を中心とした時期に重複を繰り返している。

続く、8世紀後葉には、F区第1・3・40・91・110・134・147・149・157・160号住居跡とハッ島第10・17号住居跡が構築されている。

8世紀末～9世紀初頭頃の住居跡として、F区第11・34・107・109・111・125・139・152・158・164号住居跡があげられる。

9世紀になると、F区第175号住居跡とハッ島第4・5—6・7号住居跡が9世紀前葉、ハッ島第31号住居跡が後出的な9世紀前半代に位置づけられよう。

続く、9世紀中葉の住居跡として、F区第12・89・92・98・101・117号住居跡とハッ島第16号住居跡があげられる。またF区第52・84号住居跡とハッ島第11—12—21号住居跡がこれに先行し、F区第74・82・85号住居跡とハッ島第28号住居跡は後出的である。

F区第17・18・25号住居跡は9世紀後葉を中心とした時期に重複が繰り返され、最も後出する。ハッ島第32号住居跡が9世紀後半代に位置づけられる。

以上のように、E・F区～ハッ島住居跡群は6世紀後葉に構築が始まり、本格的な集落展開は7世紀初頭から開始されている。9世紀代になると住居跡軒数が驚りがみえはじめ、9世紀後葉頃に終焉を迎えている。しかし、全般的に遺物の出土量が少なく、また出土遺物が皆無である住居跡も多数存在している。このような状況において、年代を推定し得る資料は乏しく、不確定要素を多分に含んでいる。さらに、同時期と捉えた住居跡の重複例も散見され、詳細な時期区分の必要性を感じる。ただし、この重複例は住居存続期間を示唆する資料ともなり、比較的短期間のうちに増改築や移転が行われていたことを推測させる。

E・F区～ハッ島掘立柱建物跡群

E・F区～ハッ島から発見された掘立柱建物跡は、E区3棟、F区89棟、ハッ島1棟の合計93棟である。住居跡群の範囲と対応し、E・F区～ハッ島掘立柱建物跡群として認識できる。しかしハッ島唯一の掘立柱建物跡はF区最東端の第1号掘立柱建物跡から約300m近くも離れており、同一の掘立柱建物跡群として捉えることに強い抵抗を感じる。また周囲にも掘立柱建物跡の存在を窺うこともできず、迷点的に位置している。

掘立柱建物跡は柱掘形のみで検出されるという遺構の性格上、出土遺物等から推定される年代観には多くの不確定要素が含まれている。また遺物の出土位置も問題となり、柱痕・柱抜取痕出土遺物の示す下限年代と、柱掘形充填土層出土遺物の示す上限年代とに区別する必要がある。いずれにしても、掘立柱建物跡の時期推定における不確定さは大きく、常に考慮しておく必要がある。

E・F区の掘立柱建物跡のうち、中世と思われる31棟を除いた61棟は、古代の掘立柱建物跡と推定される。そのなかで、時期が推定される掘立柱建物跡は30棟である。

最も古く位置づけられるのは、3間×2間側柱建物跡のF区第11号掘立柱建物跡である。7世紀前葉を上限とするが、後続する7世紀中葉段階の掘立柱建物跡

との比較から、この時期まで遡らせることには疑問が残る。仮に7世紀前葉段階と位置づけると、住居跡の構築からさほどの期間をおかずには掘立柱建物跡の建立が開始された可能性を示唆する資料となる。

次に7世紀中葉を上限とする、F区第31・49・50・51号掘立柱建物跡があげられる。F区第31号掘立柱建物跡は唯一の1間×1間の建物跡で、削平された住居跡柱穴の残痕の可能性もある。しかし、その周辺には住居跡がなく、またA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群においても数棟の1間×1間の掘立柱建物跡が検出されていることから、掘立柱建物跡と捉えておく。F区第50号掘立柱建物跡は2間×2間総柱建物跡で、側柱・東柱の柱掘形の規模に差がなく、倉庫としての機能が想定される。F区第49・51号掘立柱建物跡は4間×2間側柱建物跡で、柱間寸法が長い。同規模の古代の掘立柱建物跡と柱掘形を比較すると、平面形態が円形・隅丸方形で、規模は浅小である。また柱頭が細く、充墳方法も粗い。同時期の住居跡柱穴と近似する様相が窺われ、柱の樹立技術が堅穴住居跡構築技術の延長上にあるものと推測される。F区第49・50・51号掘立柱建物跡の3棟は近接し、1単位の掘立柱建物跡群として把握できるかもしれない。ただし、総柱建物跡のF区第50号掘立柱建物跡は軸方位が若干異なり、機能差や集落構成上の意識の違いなどが考えられるが、明確ではない。少なくとも、F区第49・51号掘立柱建物跡は、建築技術的な特徴から1単位として容認される。

続いて、F区第34号掘立柱建物跡が7世紀後葉～8世紀初頭、F区第47号掘立柱建物跡が7世紀末～8世紀初頭を上限とする建物跡としてあげられる。F区第34号掘立柱建物跡は桁行東面に庇を設ける身舎3間×2間側柱建物跡で、身舎と庇の柱掘形規模の格差は歴然としている。F区第47号掘立柱建物跡は2間×2間総柱建物跡で、倉庫としての機能が想定される。2棟とも、柱掘形の規模が深大となり、版築状に充墳することによって柱を樹立させる本格的な掘立柱建物建築技術をみることができ。

8世紀前葉を上限とする掘立柱建物跡として、F区第27・32・77・85号掘立柱建物跡があげられる。AZ～BH-37～39グリッドの東西30m、南北90mの範囲内に分布し、F区第27・32・77号掘立柱建物跡の軸方位が近似する。F区第27・32号掘立柱建物跡は3間×2間側柱建物跡で、近接している。F区第77号掘立柱建物跡は2間×2間総柱建物跡で、倉庫と推定される。F区第85号掘立柱建物跡は、これ而建て替えたF区第84号掘立柱建物跡から推測した年代で、軸方位はF区第34・47号掘立柱建物跡に近似している。4間×2間側柱建物跡で、桁柱の一部が浅い溝によって連結される、いわゆる「溝もち」掘立柱建物跡である。

8世紀中葉を上限とするものにF区第17・35・84号掘立柱建物跡があげられるが、軸方位に共通性は認められない。F区第17号掘立柱建物跡は3間×2間側柱建物跡で、同規模のF区第16・19号掘立柱建物跡と同間隔に軸を揃えて建ち並んでいる。F区第35号掘立柱建物跡は4間×2間側柱建物跡で、深大な柱掘形は、版築状に丁寧に充墳されている。F区第84号掘立柱建物跡は、F区第85号掘立柱建物跡而建て替えた建物跡である。F区第85号掘立柱建物跡が桁行を東西に面する4間×2間「溝もち」側柱建物跡であるのに対し、F区第85号掘立柱建物跡は桁行を南北に面する4間×3間総柱建物跡で、特異な建て替え例である。F区第85号掘立柱建物跡は梁行西列の柱掘形が、東側梁行の柱掘形に比べて浅く、梁行西面に庇を設ける身舎3間×3間の総柱建物跡の可能性もある。東柱の柱掘形は側列の柱掘形よりも簡易で、東立て床貼りの住居系建物跡と想定される。

続いて、8世紀後葉を上限とする掘立柱建物跡は棟数が多くなり、F区第2・12・19・24・26・33・43・44・45号掘立柱建物跡があげられる。F区第2・12号掘立柱建物跡は3間×2間側柱建物跡で、軸方位を真北方向に向ける。桁行を南北に面するF区第12号掘立柱建物跡と、比較的近接した位置にあるE区第1・2号掘立柱建物跡は軸方位がほぼ一致し、関連が注目される。同規模のF区第16・17・19号掘立柱建物跡は軸

を揃えて同間隔に建ち並んでいる。F区第16号掘立柱建物跡の時期が不明なため想像の域を出ないが、F区第16号掘立柱建物跡→F区第17号掘立柱建物跡→F区第19号掘立柱建物跡の順に、計画的に建立されていることも考えられる。F区第33号掘立柱建物跡は、3間×2間側柱建物跡である。先行するF区第84・85号掘立柱建物跡と近接し、軸方位も近似することから、関連性が想起させられる。F区第24・26号掘立柱建物跡は2間×2間総柱建物跡で、倉庫としての機能が想定される。比較的近接し、平面規模・軸方位も近似していることから、関連が注目される。F区第43号掘立柱建物跡は桁行を南北に面する3間×2間側柱建物跡である。これに近接し、軸方位も近似するF区第45号掘立柱建物跡は、桁行西面・梁行南面に庇を設けた身舎5間×3間「溝もち」側柱建物跡である。この2棟の関連を仮定すると、F区第45号掘立柱建物跡に対し、F区第43号掘立柱建物跡が従属的な建物跡と想定される。またF区第45号掘立柱建物跡と重複するF区第44号掘立柱建物跡は、時期推定の根拠が乏しく、軸方位や柱掘形の規模も異なっている。

8世紀末から9世紀初頭を上限とする一群のなかに、8世紀後葉段階から認められた軸方位をほぼ真北に向けるF区第1・13号掘立柱建物跡が存在する。またF区第5・25号掘立柱建物跡の軸方位も、他の時期に比べて真北に近い。これらの掘立柱建物跡はF区の調査区北辺に沿って位置している。3間×2間側柱建物跡のF区第53号掘立柱建物跡は例外的で、軸方位を西に傾け、調査区西辺部に位置している。3間×2間側柱建物跡のF区第1号掘立柱建物跡は、重複するF区第2号掘立柱建物跡との時期差が小さく、建て替えの可能性も考えられる。F区第5号掘立柱建物跡は3間×2間側柱建物跡で、西側に並列するF区第1号櫓列跡との関連が想起させられる。F区第25号掘立柱建物跡も3間×2間側柱建物跡で、軸方位を近似させるF区第28・30号掘立柱建物跡との関連も注目される。F区第13号掘立柱建物跡は、桁行を南北に面し、西面に庇を設ける身舎3間×2間の総柱建物跡である。東

柱の柱掘形の規模は小さく、東立て床貼りの建物跡と推定される。庇列・側列・東柱列の柱間は桁行が一致するのに対し、梁行が異なる特異な建物跡で南側を正面と意識した、自然地形を色濃く反映している。また庇列隅柱から45°の方向に側列隅柱が位置し、寄棟造の上屋構造が想定される。

続くF区第46号掘立柱建物跡は9世紀前葉を上限とする可能性がもたれるが、時期を類推する根拠は乏しい。重複するF区第51号溝跡を人為的に埋め戻して建立された建物跡で、F区第51号溝跡との新旧関係から8世紀代に遡らせることは難しい。桁行を東西に面し、西面に庇を設ける身舎4間×2間の側柱建物跡である。長大なF区第45号掘立柱建物跡と軸方位が近似し、F区第53号掘立柱建物跡と近接している。この3棟の掘立柱建物跡の時間的な隔たりは小さく、関連が想起させられる。

E・F区掘立柱建物跡群において、F区第46号掘立柱建物跡に後続する古代の掘立柱建物跡は不明である。掘立柱建物跡は柱掘形のみが検出されるにすぎないという遺構のもつ性格と、遺物の出土層位に左右される上限・下限年代の判断も必要となり、年代の推定にはきわめて多くの不確定要素を含んでいる。そこで、E・F区掘立柱建物跡群の建立が9世紀前葉をもって収束するものと判断することはできず、E・F区～ハツ島住居跡群が9世紀後葉まで構築され続けていることから、掘立柱建物跡も併行して建立され続けていた可能性が高い。

E・F区～ハツ島住居域の展開

不確定要素が多分に含まれている状況ながら、住居跡・掘立柱建物跡の時期推定を試みた。この年代から、改めて集落の展開をまとめておく必要がある。

住居跡は6世紀後葉に出現するが、本格的な展開は7世紀に開始される。また、さほどの時間差をたず、掘立柱建物跡も建立され始めている。

7世紀代の住居跡の分布は特徴的で、BEグリッド以南、50グリッド以西のF区の調査区西辺に沿った幅約50mの範囲内にほぼ限られている。この範囲は立地

する自然堤防がスムーズに上流側から繋がるエリアで、二又に分かれる南西側にあたる。また、BEグリッド以北には住居跡の空白地帯が存在し、先行するA・B・C・D・G・H区居住城がE・F区～ハッ島居住城へ拡散的に広がったわけではなく、新たに居住城の形成を開始したことを窺わせる。しかし自然地形的にはA・B・C・D・G・H区の居住城展開を踏襲し、眼下に元荒川を臨むF区の調査区西辺に沿ったエリアに進出している。特に、BLグリッド以南は二又に分かれる北西側自然堤防突端部にあたり、標高が低い悪条件にもかかわらず、頑なまでに固執しているようにもみえる。この時期の住居跡は1軒を基本単位として転々と分布し、近接した位置に同時期の住居跡が所在する例はきわめてまれである。一方、後出的なF区第49・50・51号掘立柱建物跡の周辺には住居跡も比較的多く分布し、7世紀代の居住城の中心的な位置を占めている。

8世紀代になると住居跡軒数は増加し、高燥な自然堤防北東側に分布域の中心が移っていく。E区第1号住居跡やハッ島集落の開始は、その一連の動きのなかにあり、居住城が自然堤防の下流（東側）に向かって拡大していったものと捉えられる。

8世紀代の住居跡軒数の増加と居住城の拡大は、8世紀代1四半期に終焉を迎えるA・B・C・D・G・H区住居跡群の情勢との連動が予想される。これは吉田が7世紀後半から8世紀初頭段階（第IV期）に集落変遷の画期を求めた、既存居住城の縮小化、新たな居住城への進出、掘立柱建物跡の構築の開始という方向性を踏襲している。そこで、築道下遺跡の住居跡の居住城が新たに形成され始めたE・F区～ハッ島居住城へ移動したことが想定される。7世紀代には住居跡空白地帯であったBEグリッド以北にも住居跡が構築され始め、これと併行し、築道下遺跡全域に掘立柱建物跡が建立され続けられていることから、8世紀代における築道下・ハッ島遺跡の集落の動向を単に居住城の移動とは捉えられず、更なる集落域の発展・拡大と位置づけることができる。

8世紀代のE・F区～ハッ島居住城の住居跡は2～3軒を基本単位として分布し、A・B・C・D・G・H区居住城の住居跡の推移状況に酷似している。この基本単位と生産・共同労働等の関係について検討することはきわめて難しいが、基本単位＝生産・共同労働単位という経済的な図式を難解に導き出すのではなく、「すぐ近くに隣家がある」という生活上の安心感などの人間心理等にも配慮する必要性を感じる。

8世紀代のE・F区～ハッ島居住城の掘立柱建物跡は、前葉・中葉段階にはAZ～BH-37～40グリッドの東西50m、南北90mの範囲内に分布し、後葉段階に至って、棟数の増加とともにF区全体に拡散している。

住居跡・掘立柱建物跡の動向とともに、8世紀代のE・F区～ハッ島居住城において溝跡が重要な役割をもっている。ただし、溝跡は住居跡・掘立柱建物跡をはじめ、多くの遺構と重複するために遺物の混入が著しく、時期の特定は難しい。F区第53号溝跡は、7世紀後葉に位置づけられるF区第61号住居跡よりも先行し、幅の割に、深く掘り込まれている。C区第125号溝跡—F区第59号溝跡は7世紀後半から8世紀初頭頃に掘削された溝跡で、方形に巡っている。

確実に8世紀代と捉えられるのは、F区第21・24・26・34・49・50・51・55号溝跡である。F区第50号溝跡とF区第51・55号溝跡は平行する2条の溝跡で、C区第125号溝跡—F区第59号溝跡と走行方向が一致する。重複遺構との新旧関係から、2条同時に存在していた可能性は少なく、先行するF区第50号溝跡が8世紀前葉頃、後出するF区第51・55号溝跡は8世紀中葉頃と想定されるが、存続期間は短い。F区第26号溝跡はBD45・46グリッドに地山を掘り残したブリッジが設けられている。これと平行するF区第24号溝跡とF区第21・34号溝跡は道路跡側に付設された側溝の可能性も考えられる。F区第24号溝跡、F区第21・34号溝跡と重複するF区第115号住居跡は8世紀前葉頃に位置づけられ、またF区第26号溝跡が中世まで埋没しきつていなかったことからF区第115号住居跡よりも後出する可能性が高く、8世紀中葉を上限とする。F

区第50号溝跡とF区第55・51号溝跡と交差するF区第49号溝跡は走行方向がF区第26号溝跡西辺とほぼ一致し、8世紀末～9世紀初頭頃と思われる。これらの溝跡のなかで、F区第53号溝跡は用途が不明で、方形に巡るC区第125号溝跡—F区第59号溝跡については後述する。平行するF区第50号溝跡とF区第55・51号溝跡は、単に集落内を区画する溝跡とするにはその意図がみえない。F区第26号溝跡は居住域の外界とを画する溝跡で、居住域の北側への拡大を規制するとともに、東側方向への展開を促進している。平行するF区第49号溝跡は集落内を区画していた可能性があり、例外はあるが、9世紀代の住居跡・掘立柱建物跡はこの溝跡より東側に分布している。

方形に巡るC区第125号溝跡—F区第59号溝跡に囲まれた範囲には、平行するように配置された住居跡群が配されているが、規模・質・時間的な特殊性は認められず、連想される豪族居館跡等の区画溝とは性格が異なる。既存のA・B・C・D・G・H区居住域との間に存在した、7世紀代の空白地帯に7世紀末～8世紀初頭段階から住居跡が構築され始めたことは、集落の発展的拡大を象徴している。

9世紀代になると、住居跡軒数・掘立柱建物跡棟数ともに驕りがみえはじめる。住居跡は伝統的な1～3軒を基本単位として展開しているが、1軒を単位とするものが多い。また単位数も減少し、軒数の減少へと繋がっている。9世紀後葉を中心に重複を繰り返したF区第17・18・25号住居跡を最後に住居跡は終焉を迎えている。掘立柱建物跡は9世紀前葉の可能性がもたれるF区第46号掘立柱建物跡に後続する建物跡は明らかではないが、住居跡と併行して、9世紀後葉まで建立が続けられていた確率は高い。

6世紀後葉に萌芽し、7世紀代に本格的な形成が開始されたE・F区～ハツ島居住域は、9世紀後葉まで活発な展開を続けている。しかし約300年にわたって平滑的な変遷経過を辿ってきたわけではなく、その消長過程から2度にわたる画期を求めることができる。

まずはじめの画期を、7世紀末～8世紀初頭頃に求

めることができる。7世紀代には眼下に元荒川を臨むエリアに頑なまでに固執されていた居住域が、二又に分かれる自然堤防北東側に分布の中心を移していく。この象徴的な現象として、ハツ島エリアにも住居跡の構築が開始されている。掘立柱建物跡も堅穴住居跡構築技術の延長から、本格的な掘立柱建物跡建築技術の受容が認められている。この時期は、本格的な律令体制が浸透し始め、各地方の官衙の造営が活発化する。このような社会情勢を反映し、より広いエリアへ集落展開の地を求めた方向性がみられ、建築技術等の革新をも促したことが予想される。

この時期を象徴する遺物として、いわゆる「小針型環」と湖西窯・秋間窯等で生産された須恵器があげられる。

「小針型環」は6世紀前半代から埼玉古墳群周辺を中心地域として分布する土師器環で、「小針型環」もしくは「埼玉型環」と認識されている。斎藤國夫は、小針遺跡の発掘調査の成果から「小針型環」が8世紀前半頃まで継続するものと捉えているが(斎藤1990)、築道下遺跡では7世紀代をもって消滅し、8世紀代までは継続されていない。

築道下遺跡から出土した湖西窯・秋間窯等の須恵器の数量は、県内遺跡において、きわめて高いカウント数をほこっている。これらの須恵器の出土は、須恵器流通においてきわめて広範囲にわたる交易・経済活動を物語っている。

政治的な社会情勢の波及や文化・技術の伝播、経済活動の背景には、眼下に流れる元荒川の水運が大きな役割を担っていたことが想定できる。この河川交通網の存在が、長きにわたる巨大集落の形成を可能にしていたものといえる。ここで注目されるのが、「埼玉津」である。「埼玉津」の所在地については未だ確定できないが、築道下・ハツ島遺跡の発掘調査において「埼玉津」に直接関わるような資料は見えず、その候補地となる条件は乏しい。「埼玉津」と係わる河川交通を現在の新幹線や高速道路に例えるならば、元荒川の河川交通は在来線や一般道として機能していたものと思

像される。

築道下・ハツ島遺跡にとって元荒川は、集落を支える重要な河川交通路として強く意識されている。例えば、掘立柱建物跡は元荒川を意識した配列展開を示し、桁行西面に付設された不可思議な庇も元荒川を意識した方向に付設されているものと解釈できる。一方、河川交通路としての役割が大きすぎるためか、日常生活を営むための「水」としての機能は弱く、一般に河川に面した集落遺跡では土鍾等の漁労具が多量に出土するのに対し、築道下遺跡ではこれらの遺物は皆無に等しい。また、いわゆる「水辺の祭祀」を想定させる遺構・遺物も認められていない。さらに、眼下に河川が流れているのに関わらず、合計606井を数える井戸跡が発見され、生活用水は井戸によって得ている。

続いて、8世紀末～9世紀初頭頃に次の画期を求めることができ、住居跡・掘立柱建物跡ともに造営のピークを迎えている。広域な経済活動も活発に行われ、F区第148・149号住居跡からは8世紀末の東建寺木段階の新治産須臾器環が出土している。これ以後は、住居跡・掘立柱建物跡の構築に驕りがみえ、衰退・減少傾向を示している。

遺構が確認されていない10世紀から中世に至る築道下・ハツ島遺跡の集落動向については、不明である。9世紀後葉に住居跡・掘立柱建物跡の構築が終焉を迎えているが、これが集落の終焉とは限らず、新たな居住構造物へ転換が図られた可能性も考慮する必要がある。ハツ島第38号土壇から10世紀前半の東建江産の灰軸腕が出土するなどの集落の存続を想定させる資料も存在している。

集落変遷の経過のなかで、F区の調査区西辺に沿ってみられる地震痕跡もポイントとなる。C区においても地震痕跡が各所に残存しているが、規模の小さな地割れや地盤沈下が認められるにすぎない。しかしF区においてはその影響は甚大である。西辺に沿って大規模な地滑りが発生し、多くの遺構が壊されている。またBLグリッド以南では大地震による地中の液状化現象に伴う噴砂の通り道である砂脈が常所に残されて

いる。このような大地震の影響は埼玉東北部の行田・熊谷・深谷・妻沼・岡部などの広範囲にわたる遺跡の発掘調査によって確認されている。妻沼低地を中心に分布するものと推定され、築道下遺跡は分布域の最南端に位置している。妻沼低地に立地する地震痕跡が発見された遺跡の発掘調査成果では、大地震の時期を8世紀後半から10世紀後半の間に求められている。文献史料では、『類聚国史』に弘仁9年(818)、『日本三代実録』に元慶2年(878)の武藏国の地震被害の記述が残されているが、これ以後13世紀までは記録がみられない。堀口萬吉は、古代遺跡に噴砂の傷跡を残した大地震に弘仁9年の被災地震を想定している(堀口ほか1985)。ここで注目されるのが、F区第152号住居跡の存在で、8世紀末～9世紀初頭頃と思われる須臾器と10世紀後半と推定される輪軸成形の土師質環・碗が出土している。10世紀後半の遺物は地滑りによって陥没した部分から出土し、10世紀前半の建造物も見受けられないことから、地震被災後に混入した遺物として捉えた。この状況から、被災地震の時期を9世紀初頭から10世紀後半の間に求めることができ、堀口案より近い時期を示す資料を得たことになる。現状において、被災地震の時期を特定することはできないが、9世紀代に大規模な地震災害を受けたことは集落の動向と無縁ではなく、9世紀代の住居跡軒数・掘立柱建物跡棟数の激減は、地震災害の影響も考慮しておく必要がある。なお、砂脈の断面観察から、2回にわたる地震痕跡が確認され、堀口によって、昭和6年(1931)9月21日に発生した西埼玉地震に伴う可能性が示唆されている。

中世集落の景観

築道下遺跡の周辺は、中世に久下・忍・河原・長野・行田・麻績・渡柳・野・津の戸・笠原・真名板・多賀谷などの武士が蟠居した地域である。これらの氏名は地名として残り、館跡と推定される遺跡も多く所在している。築道下遺跡が発見されている中世墓跡も、この時期の武士との関連が推定されている。中世の遺構として、掘立柱建物跡・茶毘跡・井戸跡・溝跡がある

が、半地下式の建造物と捉えられている堅穴状遺構は検出されていない。

溝跡の多くは、集落をほぼ等間隔に区画している。数条単位に平行し、立地する自然堤防に直交している。C区第127号溝跡から続く、F区第62・78号溝跡は自然堤防の斜面部を画している。この溝跡以西・以南には掘立柱建物跡などの遺構は認められず、中世集落を囲う溝跡であると同時に、集落の排水機能も想定される。

中世の掘立柱建物跡の時期根拠は乏しく、厳密には特定できない。古代の代表的な掘立柱建物跡と比較すると、柱掘形の規模が極端に小さく、浅い。柱列びも整わず、また柱間寸法が不統一であるがために、対面する柱位置にずれを生じている建物跡も多く存在している。なかには、角張った方形を呈する柱掘形があり、柱材に角材が使用されていたことを予想させる。さらに組み合わせや配置の規則性が把握できずにグリッドピットとして処理した柱痕や柱抜取痕が確認できるピットも、この時期の建物跡である可能性がある。

E・F区掘立柱建物跡群には、中世と思われる掘立柱建物跡が31棟ある。柱間規模は3間×2間・2間×2間を主体に、4間×3間・4間×2間の建物跡が存在する。また古代の掘立柱建物跡にはみられない2間×1間の柱間規模も認められている。柱間寸法は千差万別で、1間3.60mを測る建物跡もある。中世建物跡の機能を推定することは難しいが、多くは居住系の建物跡と予想される。しかし、柱掘形の規模からは重厚な作りの上屋構造を復元することはできず、それ故

2. 掘立柱建物跡の検討

築道下・ハッ島遺跡から検出された掘立柱建物跡は、古代・中世に建立されたもので、A区7棟、B・C区118棟、D区7棟、E区3棟、F区89棟、G区9棟、H区5棟、ハッ島1棟の合計239棟を数える。また柱痕や柱抜取痕から建物跡の存在が推定されるが、配置の規則性や組み合わせを把握できなかったグリッドピットも含めると、掘立柱建物跡の棟数が増加することは確

に、不整列な柱列びや柱間寸法の不統一さが建物に与える影響は少なかったものと推測される。

掘立柱建物跡の分布状況から建物配列などの規則性を読みとることはできない。1棟単独もしくは2～3棟を基本単位として分布する傾向が窺われる一方で、BE～BF-57-59グリッドには建物跡が集中していることも事実である。また、詳細な時期区分ができないために、基本単位とした建物跡が同時期に軒を並べていたとする確証もない。さらに、柱痕や柱抜取痕が確認できるグリッドピットが建物跡に復元されると、BE～BF-57-59グリッドと同様な状況に陥る可能性もある。その場合、集落景観がまったく異なってしまう。

井戸跡は、古代よりも平面規模が大きな素掘りの井戸である。中世も眼下に流れる元荒川を生活用水として利用していない。自然地形の性格上、多大な労力を注ぎ込まずに簡略な井戸を掘削することによって水を得ることができ、さらに生活空間のなかに水場を取り込める利点も見逃せない。

茶毘跡は、E・F区～ハッ島地区に15基検出されている。中世の建物数が把握できない状況はあるが、茶毘跡の数は比較的多いものと推測される。建物跡分布域の外辺部に分布しているが、溝跡に囲まれた居住空間のなかに位置している。ここから中世の死生観を垣間みることができ、現在のように「死」を極端に忌み嫌うのではなく、人の死を自然現象として受け入れていたとも読みとることができる。

実である。239棟のうち、中世と推定される掘立柱建物跡42棟も含まれている。

掘立柱建物跡の分布状況から、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群146棟と、E・F区～ハッ島掘立柱建物跡群93棟に分割される。中世と推定される掘立柱建物跡は、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群11棟、E・F区～ハッ島掘立柱建物跡群31棟が含まれ

ている。分割されたA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群は7区域の集中区域に細分され、一部に建物跡配列の規則性を窺わせている。一方、E・F区～ハッ島掘立柱建物跡群では、ハッ島唯一の第1号掘立柱建物跡が迷点的な存在となっている。

掘立柱建物跡の形状

築道下・ハッ島遺跡から検出された239棟の掘立柱建物跡のなかで、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群146棟については、既に栗岡が「築道下遺跡II」のなかで考察を行い、さらに「築道下遺跡III」・「築道下遺跡IV」で報告された新資料を付加して先述している。ここではE・F区～ハッ島掘立柱建物跡群93棟のうち、古代の掘立柱建物跡62棟について検討を試みていく。

掘立柱建物跡は、建物の外周に柱が配置される側柱建物と、外周および束位置にも柱を配置する総柱建物跡の両者が検出されている。側柱建物は居住系建物が想定され、総柱建物は一般に倉庫としての機能が推測されている。62棟の掘立柱建物跡のうち、総柱建物跡16棟、側柱建物跡46棟を数え、総柱建物跡25.8%、側柱建物跡74.2%の比率となる。

F区第31号掘立柱建物跡は、唯一検出された1間×1間の建物跡である。周囲に住居跡がみられず、A・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群において数棟の1間×1間の建物跡が確認されていることから、掘立柱建物跡と捉えているが、削平された住居跡柱穴の残痕である可能性は拭いきれない。築道下遺跡の1間×1間の建物跡は、柱間寸法が長いことが特徴としてあげられる。県内では、狭山市宮ノ越遺跡第6・12・13・18号掘立柱建物跡（小澤他1982）や同部阿六反田遺跡C区第5・9・10・12・14号建物跡（石岡他1981）等の例があり、建物規模から倉庫の機能が推定されている。

F区第45・85号掘立柱建物跡は、いわゆる「溝もち」掘立柱建物跡である。「溝もち」掘立柱建物跡については中田英が問題提起し、柱穴間を浅い溝によって連結した建物跡を「溝もち」掘立柱建物遺構と仮称してい

る。「溝もち」掘立柱建物跡は柱筋だけを溝状に掘りそれのみを版築する布掘地業とは同一視できず、柱位置だけを掘り版築する坪掘地業との中間的な形態と捉えている。「溝」の機能については、掘立柱建物の沈下に対する処置として、柱と柱を横材で繋いで支持する地質の横木の埋設とする案に対し、沈下を懸念する上屋構造をもつ多数の掘立柱建物跡の必要性や平面配置における不規則さから否定している。そして鎌倉時代の「一運聖人行状繪圖」・「一運聖人繪詞傳」や鎌倉市二ノ島居西遺跡で検出された13世紀前半と推定される建物跡から、地中に埋め込まれて立てられている壁体の掘形に相当するという案を導き出している。さらに、「溝もち」の承譜を布掘技術の影響下に求め、東国の官衙遺跡に導入された布掘技術の一部が用いられた可能性を示唆している（中田1981）。

これに対し斎藤欣延は、関東の掘立柱建物跡は坪掘・布掘・「溝もち」という分類がなされているが、坪掘・布掘が建物建築の作業工程を示すのに対し、「溝もち」は検出された柱穴の状態を表す概念であるとして、同一視することを否定している。斎藤は横沢部衙正倉跡と推定されている中宿遺跡における建物跡の下部構造について、建物建築前の地固めを行う地業のあり方と柱穴の掘形に着目した分類を行い、「溝もち」建物跡を3種類の異なる範疇で捉えられる作業工程に分類している。このなかには、布地業→坪掘の2工程が考えられるものもあり、より堅固な下部構造を考えた結果と捉えている（鳥羽他1999）。

中田のいう「溝もち」掘立柱建物遺構は、建物側柱を浅い溝によって連結した建物跡を対象としたものである。「溝もち」掘立柱建物遺構には総柱建物跡が含まれているが、その側柱と束柱を溝によって連結する建物跡については言及していない。一方、斎藤は正倉遺構を中心とした従来は布掘地業として捉えられている建物跡を中心に考察を行ったもので、根本的に対象資料が異なっている。ただし、斎藤が「溝もち掘」と仮称した、従来は布掘地業として一括していたなかに「柱穴間を浅い溝が連結する」下部構造における作業工程

の認識は卓見である。

これまででは、柱穴間を溝が連結する掘立柱建物跡に対して、「溝もち」・「布掘」と曖昧に分類してきている。なかには、側柱建物跡と総柱建物跡の区別すら行われていない例も見受けられる。一般に側柱建物は居住系建物、総柱建物は倉庫系建物という異なる機能をもつ上屋構造が推定されている。また倉庫系建物と推定される総柱建物跡のなかで、東柱が弱い柱掘形の場合には東立て床貼りの建物と想定されるものがある。そこで、まず掘立柱建物跡の上屋構造の復元を試み、これを念頭において下部構造を再検討する必要性を感じさせる。

総柱建物跡

16棟検出された総柱建物跡の柱間規模の内訳は、2間×2間12棟、3間×2間1棟、3間×3間1棟を数える。またF区第84号掘立柱建物跡は4間×3間の柱穴が列んでいるが、柱掘形の形状から3間×3間の身舎に庇が付設された可能性ももたれる。またF区第13号掘立柱建物跡は、3間×2間の身舎のなかに1間×1間の東柱が列び、身舎外周の四面に5間×3間の庇が付設されている。

総柱建物跡の規模は、2間×2間が桁行3.20～5.60m・梁行3.00～4.60m・面積9.60～25.76㎡、3間×2間が桁行6.80m×梁行5.10m・面積34.68㎡、3間×3間が桁行7.35m×梁行5.70m・面積41.90㎡、4間×3間が桁行9.60m×梁行6.60m・面積63.36㎡を測る。2間×2間の建物規模は、柱間寸法1.8m前後・面積9.60～12.96㎡、柱間平均寸法2.0～2.1m・面積15.12～17.64㎡、柱間寸法2.2m超・面積18.33～25.76㎡の3群に分割される。またF区第13号掘立柱建物跡は、身舎桁行6.90m×梁行5.50m・面積37.95㎡、庇桁行11.20m×梁行10.20m・面積114.24㎡の巨大な建物跡である。

桁行・梁行が同じ柱間数の建物跡は正方形に柱が列ぶものと錯覚しているが、12棟の2間×2間建物跡のうち、桁行・梁行の規模が等しいものは4棟のみである。ほかの8棟の梁行/桁行比率をみると、3棟が90%

を越えて正方形を指向しているが、4棟は80%強程度で、はじめから長方形建物を意図しているものがある。3間×2間・4間×3間の建物跡が長方形建物跡を意図していることは当然であるが、桁梁同柱間数の総柱建物跡において正方形・長方形という指向の違いが存在し、興味深い。

一般に、桁梁同柱間数の総柱建物跡は倉庫としての機能が推定されている。掘立柱建物自体は、側柱のみで建物構造を支えることができるが、あえて東柱も樹立させる理由として頑強な建物構造を必要とする機能を想定させ、倉庫跡として理解されている。ここで、桁梁同柱間数の総柱建物跡の東柱の柱掘形に着目すると、F区第58・78号掘立柱建物跡が側柱に比べて東柱が弱い。長方形総柱建物跡のF区第42号掘立柱建物跡(3間×2間)・F区第13号掘立柱建物跡(身舎3間×2間)・F区第84号掘立柱建物跡(4間×3間)も、やはり側柱よりも東柱の柱掘形が弱い。このような建物の構造は、倉庫と推定される建物と同一視することはできず、東柱が味を支える、いわば東立て床貼りの建物であった可能性が高い。3間×3間のF区第86号掘立柱建物跡は住居跡との重複が激しいために判断できなかったが、同様の建物構造が予想される。E・F区の掘立柱建物跡群において、桁梁同柱間数の総柱建物跡の正方形・長方形指向の差は、建物機能の違いが起因しているようである。

側柱建物跡

46棟検出された側柱建物跡の柱間規模の内訳は、2間×2間4棟、3間×2間30棟、3間×3間4棟、4間×2間7棟、5間×3間1棟を数え、3間×2間を基本としている。規模は、2間×2間が桁行4.80～5.20m・梁行3.80～4.80m・面積19.00～23.04㎡、3間×2間が桁行4.80～7.95m・梁行3.40～5.20m・面積16.32～40.56㎡、3間×3間が桁行5.40～8.05m・梁行5.20～6.10m・面積29.16～49.10㎡、4間×2間が桁行7.20～9.80m・梁行3.60～5.60m・面積25.92～52.92㎡、5間×3間が桁行11.20m×梁行6.40m・面積71.68㎡を測る。

庇が付設されている建物跡は3棟で、F区第34・46号掘立柱建物跡が桁行1面に、F区第45号掘立柱建物跡が桁行・梁行1面ずつに設置されている。F区第34・46号掘立柱建物跡の底部の柱掘形は身舎の柱掘形と比べ、規模格差が歴然としている。F区第45号掘立柱建物跡は身舎5間×3間の「溝もち」建物跡で、身舎柱掘形と庇柱掘形の平面規模に格差がみられないが、深さが異なり、庇柱掘形は溝によって連結されていない。庇まで含めた規模は桁行14.20m×梁行9.60m・面積136.32㎡を測り、長大な建物跡である。

掘立柱建物跡の分布・軸方位・建立時期

掘立柱建物跡と同様に柱穴の列は柵列跡が、12列検出されている。このうちF区第1・12号柵列跡を除き、いずれも2列が対になっている。10列5対の柵列跡は周辺に位置する掘立柱建物跡と方向を一致させ、柵列跡と掘立柱建物跡の関連が想起される。そこで、第608図に示したE・F区の古代の掘立柱建物跡の分布に柵列跡も含めると、3区域に集中する傾向が窺われる(第1～3群)。この状況はA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群と同様で、築道下遺跡の掘立柱建物跡は小区域に集中する傾向が特徴としてあげられる。

第1群はAZ-BH-36-42グリッドに分布する掘立柱建物跡で、F区第24-37・57・77・78・80・84-87号掘立柱建物跡の23棟と、F区第6-7・8-9・10-11号柵列跡の6列3対が含まれている。分割された群のなかで、最も範囲が広く、また棟数も多い。

軸方位に着目すると、F区33・77・80・84・85号掘立柱建物跡とF区第10-11号柵列跡、F区第24・26・27・29・32・34-36・57・78号掘立柱建物跡とF区第6-7・8-9号柵列跡、F区第25・28・30・37・86・87号掘立柱建物跡の概ね3グループに分割される。しかし、軸方位によって分割される掘立柱建物跡の推定される建立時期には統一性がみられず、軸方位と建立時期の相関関係は認められない。また1間×1間のF区第31号掘立柱建物跡は軸方位に分割されるいずれのグループにも属さず、住居跡柱穴の残欠の可能性を再浮上させられる。

第2群はBE-BJ-43-49グリッドに分布する掘立柱建物跡で、F区第20・21・41-47・49-51・53・54・61号掘立柱建物跡の15棟を数える。

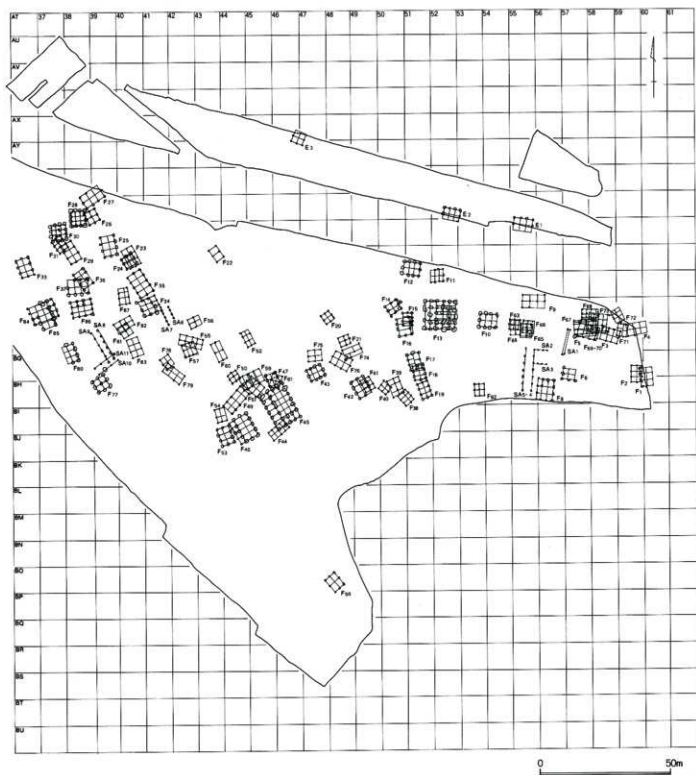
7世紀中葉のF区第49-51号掘立柱建物跡は2棟の側柱建物跡と1棟の総柱建物跡からなる基本単位とも捉えられる。軸方位はF区第41-43・45・46・47・53号掘立柱建物跡が近似し、長大なF区第45号掘立柱建物跡を中心に配列されているかのようにみえる。F区第45号掘立柱建物跡はF区第43号掘立柱建物跡と建立時期が一致し、また新旧関係・建立時期が不明な重複するF区第41・42号掘立柱建物跡のどちらかが同時期と仮定すると、F区第41-43・45号掘立柱建物跡は元荒川に面してコの字に配置されている。さらにF区第53号掘立柱建物跡とF区第46号掘立柱建物跡は推定される建立時期から、F区第45号掘立柱建物跡に続いて順次建立されている。

第3群はBA-BH-50-60グリッドに分布する掘立柱建物跡で、F区第1・2・6-8・10-19号掘立柱建物跡、E区第1・2号掘立柱建物跡の16棟と、F区第2-3・4-5号柵列跡の4列2対が含まれている。

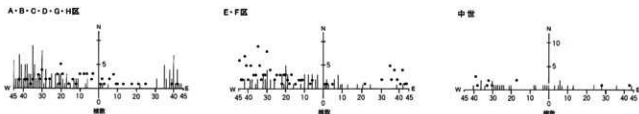
E区第1・2号掘立柱建物跡とF区第12号掘立柱建物跡の3棟は桁行を南北に面し、軸方位が比較的整っている。これに隣接するF区第11号掘立柱建物跡は、最も古く位置づけられる建物跡である。F区第14-19号掘立柱建物跡の6棟は南北に並び、軸方位をほぼ一致させて同間隔に軒を並べる同形態・同規模のF区第16・17・19号掘立柱建物跡の3棟は、北から南へ計画的に建立された可能性も考えられる。またF区第15号掘立柱建物跡とF区第18号掘立柱建物跡は軸方位から関連性が想起させられる。F区第6・7・8・10・13号掘立柱建物跡とF区第2-3・4-5号柵列跡は軸方位が整い、特別な建物跡のF区第13号掘立柱建物跡を中心に、元荒川を意識したL字形に配置されている。

以上のように、掘立柱建物跡の分布傾向から3区域に分割されるが、各区域の範囲はA・B・C・D・G・H区掘立柱建物跡群と同様に、立地する自然地形をほぼ反映している。しかしそれぞれの掘立柱建物跡の軸

第608図 築道下遺跡掘立柱建物跡配置図(3)



第609図 掘立柱建物跡軸方位



方位は第609図に示したとおり、多岐にわたっている。数値的には、軸方位をN-41.5°-35°-W、N-32.5°-25.5°-W、N-22.5°-12.5°-W、N-10.5°-3°-W、N-1°-13°-E、N-18.5°-25°-E、N-39°-41.5°-Eの7グループに分割することが可能である。しかし、立地する自然地形を反映する、築道下・ハッ島遺跡の集落の在り方から掘立柱建物跡を数値的な軸方位によって7グループに分割することは困難であると同時に、分割することに意義があるのか疑わしい。むしろ数値的な許容範囲を大きくし、視覚的に分割することが妥当であろう。改めて、第608図に示した掘立柱建物跡の軸方位を視覚的に分割すると、3方向(第1~3グループ)に分割できる。第1グループは軸方位をN-41.5°-35°-WとN-39°-41.5°-Eに向け、第2グループはN-32.5°-12.5°-WとN-18.5°-25°-Eに向ける。第3グループはN-10.5°-3°-WとN-1°-13°-Eの軸方位をほぼ真北に向ける。これは分布傾向から分割された第1群の在り方と同様である。このことから、E・F区の掘立柱建物跡において、軸方位と建立時期の相関関係を認められないが、その関連性を否定するのではなく、数世代にわたる計画的な配置展開の可能性を想像させられる。

F区第13号掘立柱建物跡の可能性

第3群としたBA~BH-50~60グリッドに分布する掘立柱建物跡のなかで、F区第6・7・8・10・13号掘立柱建物跡の5棟の建物跡とF区第2-3・4-5号柵列跡の4列2対がL字形に配列され、計画的な建立状況を想定させる。

このなかで、中心的な建物跡はF区第13号掘立柱建物跡である。桁行を南北に面し、四面に庇を設ける身舎3間×2間の総柱建物跡で、東柱の柱掘形の規模が

小さく、東立て床貼りの建物跡と推定される。この建物跡は特異で、庇列・側列・東柱列の柱間が桁行を一致させているのに対し、梁行が異なっている。このような柱列びから、元荒川を意識した南側を正面とする建物跡として認識される。また桁行柱間は中央が広く、隅が狭くなり、類型としては適切ではないが、奈良県唐招提寺金堂のような建物の横方向への広がりや錯覚させる柱間寸法を採用している。さらに、庇列隅柱から45°の方向に側列隅柱が位置し、寄棟造の上屋構造が想定される。遺物は身舎北東隅の柱掘形より火打金が出土し、鬼門の位置に埋設された地鎮具としての意味合いが想定される。

F区第13号掘立柱建物跡のような四面庇の掘立柱建物跡は、現在、千葉県を中心に注目されている集落内の仏教施設を想起させるものである。通常、寺院や仏教信仰の存在を示す墨書土器や瓦、瓦塔・瓦堂、仏具などの遺物を出土し、なかには火打ち金を出土する例も認められている。年代的には、8世紀後半~末期を中心として出現し、9世紀後半を境に急速に消滅に向かうものと捉えられており、F区第13号掘立柱建物跡の建立時期とも合致している。

またF区第13号掘立柱建物跡は、東側に軒を並べるF区第10号掘立柱建物跡との関連も注目される。F区第10号掘立柱建物跡は3間×2間の側柱建物跡で、重複する8世紀中葉頃のF区第38号住居跡よりも新しい柱掘形底面には河原石を敷き詰めて柱根を固定し、特別な建物として建立されている。位置関係から、F区第13号掘立柱建物跡を主殿とし、F区第10号掘立柱建物跡を脇殿とする構図も想像することが可能である。

さらに、F区第13号掘立柱建物跡を中心とする建物

配列のなかには、特異な建造物が建ち並んでいる。F区第2-3・4-5号櫓列跡は2列が対になる櫓列跡で、特徴的ではあるが、築道下遺跡の古代の櫓列跡としては普遍的である。しかし、F区第2-3号櫓列跡とF区第4-5号櫓列跡が垂直に交わる位置関係にあり、時期を特定できないが、同時存在を仮定すると、きわめて特異な建造物となる。またこれに隣接するF区第6号掘立柱建物跡は2間×2間のL字形に柱が配置された遺構である。F区第35・36号土壇を柱掘形と捉え、大きく歪んだ2間×2間の側柱建物跡を想定するも可能であるが、発掘調査の感触からは容認できない。上屋構造の復元は困難であるが、特異な建造物が構築されていたものと想像される。

特別な建物跡として建立されたF区第10・13号掘立柱建物跡と特異な建造物のF区第2-3・4-5号櫓列跡とF区第6号掘立柱建物跡が配列された状況から、集落内における特別な空間の存在を推測させられる。現状において、集落内の仏教施設の存在を否定する見解もあり、またF区第10・13号掘立柱建物跡からは仏教色を積極的に醸し出す出土遺物もなく、一概に集落内における仏教施設と容認することはできないが、その可能性は明記しておきたい。

F区第13号掘立柱建物跡と建立時期を同じくするF区第25号掘立柱建物跡は、真北に近い軸方位を測る。この周囲には軸方位を同じくするF区第28・30号掘立柱建物跡が位置し、F区第13号掘立柱建物跡に類似する平面正方形を意識した柱配列をとっている。いずれも3間×3間の側柱建物跡で、規模・柱間寸法がほぼ一致している。F区第25・28・30号掘立柱建物跡の3

棟の建物跡はコの字に配列されているが、F区第28号掘立柱建物跡が東立て床貼りの建物である可能性があり、位置的・構造的にF区第28号掘立柱建物跡が中心的な建物跡として把握できる。

さらに、F区第25・28・30号掘立柱建物跡の南側には、軸方位を近似させるF区第36・86号掘立柱建物跡が並立している。いずれも建立時期は明確ではないが、F区第36号掘立柱建物跡が重複する8世紀前葉のF区第63号住居跡よりも新しい。一方、F区第86号掘立柱建物跡は重複するF区第178～180・187・196号住居跡やF区第190～195号住居跡との関連から、8世紀末～9世紀初頭もしくは8世紀に位置づけられるが、存続期間は比較的短いようである。F区第36号掘立柱建物跡は桁行3間の側柱建物跡であるが、梁行柱間が東列3間・西列2間の特異な建物跡である。F区第86号掘立柱建物跡は3間×3間の桁梁同柱間数の総柱建物跡であるが、平面形態は長方形を意識したもので、東立て床貼りの居住系建物跡の可能性が高い。

軸方位をほぼ真北に向ける掘立柱建物跡は8世紀後葉段階から認められるが、この時期は軸方位が異なる長大なF区第45号掘立柱建物跡が中心的な位置を占めている。続く、8世紀末から9世紀初頭頃は集落変遷における画期にあたり、掘立柱建物跡の建立も最盛期を迎えている。それを象徴するかのようには、F区第45号掘立柱建物跡に代わって、周囲に特殊な建造物を配している特異なF区第13号掘立柱建物跡を中心に掘立柱建物跡群が再編成され、軸方位をほぼ真北に向けて配列された掘立柱建物跡の展開が繰り返されている。

築道下遺跡掘立柱建物跡一覧

番 号	位 置	種類	間 数		規模(m)		柱間寸法(m)		軸 方 位	面積(m ²)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
E-01	BA55/BBS5	側	3	(2)	7.20	(4.60)	2.40	2.30	N-8.0°-E	(33.12)	
E-02	BA52-53	側	3	(2)	6.30	(4.20)	2.10	2.10	N-9.0°-E	(26.46)	
E-03	AX46-47/AY46-47	側	(3)	2	(6.75)	4.50	2.25	2.25	N-21.0°-E	(30.38)	
F-01	BG59-60/BH59-60	側	3	(2)	6.90	(4.60)	2.30	2.30	N-6.0°-W	(31.74)	
F-02	BG59/BH59	側	3	2	6.00	4.00	2.00	2.00	N-1.0°-E	24.00	
F-03	BF58-59	側	3	2	7.05	4.70	2.35	2.35	N-18.5°-E	33.14	
F-04	BF59	側	(3)	2	(7.50)	4.40	2.50	2.20	N-7.0°-W	(33.00)	中世

番 号	位 置	種類	間 敷		規模 (m)		柱間寸法 (m)		軸 方 位	面積 (㎡)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
F-05	BE57/BF57-58	側	3	2	6.90	4.60	2.30	2.30	N-13.0°-E	31.74	
F-06	BG56-57/BH56-57	(側)	(2)	(2)	(5.20)	(4.20)	2.60	2.10	N-8.5°-E	(21.84)	
F-07	BG56/BH56	側	3	3	8.05	6.10	(2.68)	(2.03)	N-6.0°-E	49.10	
F-08	BG56	側	3	2	7.80	4.40	2.60	2.20	N-6.0°-E	34.32	
F-09	BD55-56/BE55-56	総	3	2	8.55	4.90	2.85	2.45	N-3.0°-E	41.90	中世
F-10	BE53-54/BF53-54	側	3	2	6.45	4.70	2.15	2.35	N-3.0°-E	30.32	
F-11	BC51-52/BD51-52	側	3	2	5.40	4.30	1.80	2.15	N-3.0°-W	23.22	
F-12	BC50-51/BD50-51	側	3	2	6.00	4.40	2.00	2.20	N-8.0°-E	26.40	
F-13	BE51-52/BF51-52	総	3	2	6.90	5.50	(2.30)	(2.75)	N-2.0°-E	37.95	東立て床
F-13+庇	BE51-52/BF51-52	側	5	3	11.20	10.20	(2.15)	(2.35)	N-2.0°-E	114.24	東立て床
F-14	BE50	側	2	2	4.70	3.90	2.35	1.95	N-32.5°-W	18.33	
F-15	BE50-51/BF50-51	側	3	2	4.80	3.40	1.60	1.70	N-3.0°-W	16.32	
F-16	BE50-51/BF50-51	側	3	2	6.60	4.40	(2.20)	2.20	N-10.5°-W	29.04	
F-17	BF51/BG51	側	3	2	6.40	4.40	(2.13)	2.20	N-15.5°-W	28.16	
F-18	BG51/BH51	側	3	2	5.40	4.00	1.80	2.00	N-10.5°-W	21.60	
F-19	BH51-52	側	3	2	5.85	3.90	1.95	1.95	N-19.0°-W	22.82	
F-20	BE47-48	総	2	2	3.60	3.60	1.80	1.80	N-36.0°-W	12.96	
F-21	BF48	総	2	2	4.20	3.60	2.10	1.80	N-21.0°-W	15.12	
F-22	BB43/BC43-44	側	2	1	5.20	3.40	2.60	3.40	N-35.5°-W	17.68	中世
F-23	BB40/BC40	側	3	2	7.35	4.40	2.45	2.20	N-29.0°-W	32.34	中世
F-24	BC40	総	2	2	4.20	4.20	2.10	2.10	N-30.0°-W	17.64	
F-25	BB39-40/BC39-40	側	3	2	7.50	5.00	2.50	2.50	N-12.5°-W	37.50	
F-26	BA38-39/BB38-39	総	2	2	4.40	4.40	2.20	2.20	N-27.5°-W	19.36	
F-27	AZ38-39/BA38-39	側	3	2	7.95	4.90	2.65	2.45	N-35.0°-W	38.96	
F-28	BA38/BB38	側	3	3	5.40	5.40	1.80	1.80	N-6.0°-W	29.16	東立て床?
F-29	BB37-38/BC37-38	側	3	2	7.80	4.50	2.60	2.25	N-3.0°-W	35.10	
F-30	BB37-38	側	3	3	5.40	5.40	1.80	1.80	N-7.5°-W	29.16	
F-31	BB37	側	1	1	2.70	2.20	2.70	2.20	N-25.0°-E	5.94	
F-32	BB37-38/BC37-38	側	3	2	5.25	4.10	1.75	2.05	N-39.0°-W	21.52	
F-33	BC36/BD36	側	3	2	7.50	4.60	2.50	2.30	N-19.0°-W	34.50	
F-34	BD40-41/BE40-41	側	3	2	6.75	4.85	(2.25)	(2.42)	N-22.5°-W	32.74	
F-34+庇	BD40-41/BE40-41	側	3	3	6.75	6.65	1.80	1.80	N-22.5°-W	44.89	
F-35	BC40-41/BD40-41	側	4	2	8.90	5.60	2.30	2.80	N-32.0°-W	49.84	
F-36	BC38/BD38-39	側	4	2	9.80	5.40	2.45	2.70	N-39.0°-W	52.92	
F-37	BD38	側	3	2	7.80	5.20	2.60	2.60	N-4.0°-W	40.56	
F-37	BD38	側	3	3	7.80	5.20	2.60	1.74	N-4.0°-W	40.56	
F-38	BH50-51/BI50-51	総	3	2	4.80	3.80	1.65	(1.90)	N-40.5°-W	18.24	中世
F-39	BG50/BH50	側	3	2	6.00	4.30	(2.00)	(2.15)	N-21.0°-W	25.80	中世
F-40	BH49-50	総	2	2	3.60	3.60	1.80	1.80	N-44.5°-E	12.96	中世
F-41	BG49/BH49	側	3	2	4.80	3.60	1.60	(1.80)	N-25.5°-W	17.28	
F-42	BG49/BH48-49	総	3	2	6.80	5.10	(2.26)	(2.55)	N-27.5°-W	34.68	東立て床?
F-43	BG47/BH47	側	3	2	5.40	4.40	1.80	2.20	N-26.5°-W	23.76	
F-44	BI45-46/BJ45-46	側	4	2	7.20	3.60	1.80	1.80	N-41.5°-W	25.92	
F-45	BH45-46/BI45-46	側	5	3	11.20	6.40	(2.24)	(2.13)	N-30.5°-W	71.68	
F-45+庇	BH45-46/BI45-46	側	6	4	14.20	9.60	3.00	3.20	N-30.5°-W	136.32	
F-46	BI44-45/BJ44-45	側	4	2	9.00	5.40	(2.25)	(2.70)	N-31.0°-W	48.60	
F-46+庇	BI44-45/BJ44-45	側	4	3	9.00	7.20	1.80	1.80	N-31.0°-W	64.80	
F-47	BG45-46/BH45-46	総	2	2	4.00	4.00	2.00	2.00	N-20.5°-W	16.00	
F-48	BG45	総	2	2	3.20	3.00	1.60	1.50	N-38.0°-W	9.60	
F-49	BH44-45/BI44	側	4	2	9.80	4.40	(2.45)	2.20	N-41.5°-E	43.12	
F-50	BG44/BH44	総	2	2	3.70	3.40	1.85	1.70	N-35.5°-W	12.58	
F-51	BG44-45/BH44-45	側	4	2	8.80	4.60	2.20	2.30	N-39.0°-E	40.48	
F-52	BF44-45	側	3	2	6.00	3.20	2.00	1.60	N-30.0°-W	19.20	
F-53	BI43-44/BJ43-44	側	3	2	6.60	4.80	2.20	2.40	N-20.5°-W	31.68	
F-54	BH44/BI43-44	側	2	2	5.20	3.80	(2.60)	1.90	N-14.5°-W	19.76	

番 号	位 置	種類	間 数		規模(m)		柱間寸法(m)		軸 方 位	面積(㎡)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
F-55	BF42-43	総	4	2	9.00	3.80	2.25	(1.90)	N-13.0°-E	34.20	中世
F-56	BE42-43	総	2	2	4.50	3.70	2.25	1.85	N-24.5°-W	16.65	中世
F-57	BF42-43/BG42	側	3	2	4.80	4.80	(1.60)	(2.40)	N-20.0°-W	23.04	
F-57	BF42/BG42	側	2	2	4.80	4.80	(2.40)	(2.40)	N-20.0°-W	23.04	
F-58	BO47-48/BP48	総	2	2	5.60	4.60	(2.80)	2.30	N-41.5°-W	25.76	東立て床
F-59	BG44-45/BH44	総	4	2	8.25	4.80	(2.06)	2.40	N-27.0°-W	39.60	中世
F-60	BF43-44/BG43-44	総	2	2	7.20	3.40	(3.60)	1.70	N-25.5°-W	24.48	中世
F-61	BG45-46/BH45-46	側	2	2	5.00	3.80	2.50	1.90	N-14.5°-W	19.00	
F-62	BH53	総	2	2	4.40	3.60	2.20	(1.80)	N-6.0°-W	15.84	
F-63	BE54-55/BF54-55	総	2	2	3.60	3.50	1.80	1.75	N-5.0°-E	12.60	中世
F-64	BE54-56/BF54-56	側	3	2	5.40	3.80	1.80	1.90	N-1.5°-W	20.52	中世
F-65	BE55/BF55	側	2	2	4.60	3.50	2.30	1.75	N-5.5°-E	16.10	中世
F-66	BE55/BF55	側	2	2	4.75	3.10	(2.38)	(1.55)	N-6.5°-E	14.72	中世
F-67	BE57-58/BF57-58	側	4	3	8.20	(5.02)	(2.05)	(1.67)	N-3.0°-W	(41.20)	中世
F-68	BE57-58	側	3	2	5.40	3.20	1.80	(1.60)	N-0.5°-E	17.28	中世
F-69	BE58/BF58	側	3	2	(4.65)	3.10	(1.55)	(1.55)	N-24.5°-E	(33.48)	中世
F-70	BE58/BF58	側	3	2	6.15	4.10	2.05	(2.05)	N-1.0°-W	25.22	中世
F-71	BF59	側	2	2	4.50	3.80	(2.25)	(1.90)	N-10.5°-E	17.10	中世
F-72	BE58-59/BF59	側	(3)	(2)	(5.85)	(3.50)	(1.95)	1.75	N-28.5°-W	(20.48)	中世
F-73	BE57-58/BF57-58	側	4	3	6.75	6.20	(1.69)	(2.07)	N-7.0°-E	41.85	中世
F-74	BF48-49/BG48	側	3	2	7.40	3.70	(2.47)	(1.85)	N-25.0°-W	27.38	中世
F-75	BF47/BG47	総	2	2	5.00	4.00	2.50	2.00	N-7.5°-W	20.00	中世
F-76	BF48/BG48	側	3	2	7.05	4.70	2.35	2.35	N-28.0°-E	33.14	中世
F-77	BG39/BH38-39	総	2	2	4.70	4.60	2.35	2.30	N-32.0°-W	21.62	
F-78	BG41-42	総	2	2	4.40	3.80	2.20	1.90	N-37.5°-W	16.72	東立て床?
F-79	BG41-42/BH42	側	3	2	7.80	3.80	(2.60)	(1.90)	N-35.5°-E	29.64	中世
F-80	BF37-38/BG37-38	側	3	(2)	6.60	(4.40)	2.20	2.20	N-19.0°-W	(29.04)	
F-81	BE40/BF39-40	総	2	2	4.30	4.10	2.15	2.05	N-33.5°-W	17.63	中世
F-82	BE39-40/BF39-40	側	3	2	6.90	3.80	(2.30)	1.90	N-30.0°-W	26.22	中世
F-83	BF40/BG40	側	3	2	6.90	4.40	2.30	(2.20)	N-20.5°-W	30.36	中世
F-84	BD37/BE36-37	総	4	3	9.60	6.60	2.40	2.20	N-21.5°-W	63.36	東立て床
F-85	BD37/BE36-37/BF37	側	4	2	9.60	4.80	2.40	2.40	N-19.5°-W	46.08	隣りもち
F-86	BD38-39/BE38-39	総	3	3	7.35	5.70	2.45	1.90	N-8.0°-W	41.90	
F-87	BD40/BE40	側	3	2	5.85	3.20	1.95	1.60	N-10.5°-W	18.72	
F-88	AY33-34/AZ33-34	総	3	2	5.25	2.90	1.75	1.45	N-30.5°-W	15.22	中世
F-89	AZ33-34	側	2	1	4.00	2.50	(2.00)	2.50	N-36.0°-W	10.00	中世
ハッ島01	八 M18-19/N18-19	側	3	2	8.40	4.40	(2.80)	(2.20)	N-9.5°-E	38.72	
G-01	K5-6/L5	総	(3)	2	(4.80)	4.70	1.60	(2.35)	N-34.0°-W	(22.56)	
G-02	M9	側	(3)	2	(7.20)	4.80	2.40	2.40	N-34.0°-W	(34.56)	
G-03	M8-9	側	3	(2)	8.10	(5.40)	2.70	2.70	N-38.0°-E	(43.74)	
G-04	R14-15	側	3	2	7.50	4.20	2.50	(2.10)	N-31.0°-E	31.50	
G-05	Q15/R14-15	総	2	2	5.20	5.20	2.60	2.60	N-28.0°-W	27.04	
G-06	P12-13/Q13	側	4	2	8.40	5.00	2.10	(2.50)	N-38.0°-W	42.00	高床
G-07	R15-16	側	(3)	(2)	(6.00)	(3.10)	2.00	1.55	N-15.0°-W	(18.60)	
G-08	S16/T16-17	側	(3)	(2)	(7.40)	(5.70)	(2.46)	(2.85)	N-5.0°-E	(42.18)	
G-09	R15/S15-16	総	3	(2)	7.80	(5.60)	(2.60)	2.80	N-36.0°-E	(43.68)	東立て床?
H-01	V21/W21	側	(4)	(2)	(7.60)	(5.80)	1.90	2.90	N-18.0°-W	(44.08)	
H-02	S19/T19	総	(2)	(2)	(3.10)	(2.60)	1.55	1.30	N-30.0°-W	(8.06)	建替後
H-02	S19/T19	総	2	2	4.00	3.90	2.00	1.95	N-30.0°-W	15.60	建替前
H-03	S19/T19	側	(3)	2	(6.30)	3.60	2.10	1.80	N-30.0°-W	(22.68)	
H-04	U19-20/V20	側	(4)	(2)	(10.40)	(5.80)	2.60	2.90	N-12.0°-W	(60.32)	
H-05	X23-24/Y23-24	総	6	2	14.58	5.92	2.43	2.88	N-13.0°-W	86.31	D-02と同一建物床 東立て床
A-01	K13-14	(側)	(3)	(2)	(8.10)	(5.20)	2.70	2.60	N-35.0°-E	(42.12)	
A-02	H13	側	1	1	2.50	2.30	2.50	2.30	N-40.0°-E	5.75	
A-03	M15	側	2	2	4.30	4.30	(2.15)	2.15	N-40.0°-W	18.49	

番 号	位 置	種類	間 数		規模 (m)		柱間寸法 (m)		軸 方 位	面積 (㎡)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
A-04	M15-16	側	3	2	6.60	4.30	(2.20)	(2.15)	N-43.0°-E	28.38	
A-05	O17	側	2	1	3.40	3.40	(1.70)	3.40	N-12.0°-W	11.56	
A-06	P17	側	2	2	3.90	3.70	1.95	1.85	N-38.0°-W	14.43	
A-07	Q19	側	1	1	2.20	2.10	2.20	2.10	N-42.0°-E	4.62	
01	欠番										
02	欠番										
03	欠番										
04	欠番										
05	欠番										
06	欠番										
07	O5	総	3	2	4.50	4.00	1.50	2.00	N-38.0°-E	18.00	
08	P6	側	4	2	7.50	4.70	(1.88)	(2.35)	N-45.0°-W	35.25	
09	R6	側	2	2	3.30	2.80	(1.65)	1.40	N-40.0°-E	9.24	
10	Q6	側	4	2	7.40	4.70	(1.85)	(2.35)	N-38.0°-E	34.78	
11	Q7	側	4	3	8.20	4.70	(2.05)	(1.57)	N-35.0°-E	38.54	
12	Q7	側	3	3	5.60	5.30	(1.87)	(1.77)	N-35.0°-W	29.68	
13	P7-8	側	3	2	6.45	4.40	(2.15)	2.20	N-42.0°-E	28.38	
14	Q7/R7	総	3	2	4.20	3.80	1.40	1.90	N-35.0°-E	15.96	
15	Q6	側	4	2	7.00	4.50	(1.75)	2.25	N-38.0°-E	31.50	
16	R8	側	3	2	3.70	3.70	(1.23)	(1.85)	N-42.0°-W	13.69	
17	R8	側	3	2	4.10	3.60	(1.37)	(1.80)	N-44.0°-W	14.76	
18	N3/O3	側	1	1	2.40	2.30	2.40	2.30	N-45.0°-W	5.52	
19	P6	側	4	2	6.80	4.20	(1.70)	(2.10)	N-35.0°-E	28.56	
20	R8	総	3	2	5.30	4.00	(1.77)	2.00	N-39.0°-E	21.20	
21	Q8	総	2	2	4.20	2.50	(2.10)	(1.25)	N-40.0°-E	10.50	
22	P5	総	2	2	3.80	3.70	(1.90)	1.85	N-39.0°-E	14.06	
23	P4-5	総	2	2	5.20	4.90	(2.60)	(2.45)	N-36.0°-W	25.48	
24	O4/P4	総	2	2	4.10	3.10	(2.05)	(1.55)	N-40.0°-E	12.71	
25	P4	総	2	2	3.00	2.90	(1.50)	(1.45)	N-41.0°-W	8.70	東立て床
26	O3-4	側	3	2	3.90	2.70	(1.30)	(1.35)	N-36.0°-W	10.53	
27	O3/P3	側	2	2	3.40	3.40	(1.70)	(1.70)	N-35.0°-W	11.56	
28	N3/O3	側	4	3	8.30	5.30	(2.08)	(1.77)	N-41.0°-W	43.99	
29	N2	側	1	1	2.30	2.20	2.30	2.20	N-22.0°-E	5.06	
30	S8-9/T9	側	4	2	8.40	4.80	2.10	(2.40)	N-42.0°-W	40.32	
31	S8-9/T9	側	4	2	8.80	5.40	2.20	2.70	N-42.0°-W	47.50	
32	Q9-10/R10-11	側	5	2	13.00	5.60	2.60	2.80	N-32.0°-W	72.80	布張り ?
33	R8/S8-9	側	3	3	5.60	4.60	1.87	1.53	N-39.0°-W	25.80	
34	S8-9	側	3	2	(6.15)	4.00	(2.05)	2.00	N-41.0°-E	(24.60)	
35	P1-2	(側)		2		4.20		2.10	N-45.0°-W		
36	P1-2	(側)		2		3.60		1.80	N-31.0°-E		
37	R9-10/S9-10	総	2	2	4.40	4.00	2.20	2.00	N-36.0°-W	17.60	
38	R9-10/S9-10	総	2	2	4.40	4.00	2.20	2.00	N-33.0°-W	17.60	
39	R9-10/S9-10	側	3	2	6.60	4.00	2.20	2.00	N-44.0°-E	26.40	
40	R9-10/S9-10	側	2	2	4.80	4.00	2.40	2.00	N-39.0°-W	19.20	
41	R9-10/S9-10	側	2	2	4.40	4.40	2.20	2.20	N-41.0°-W	19.36	
42	S10	側	2	2	(4.35)	3.10	(2.18)	(1.55)	N-30.0°-W	(13.48)	
43	S10/T10	側	3	2	5.10	4.20	1.70	2.10	N-35.0°-W	21.42	
44	P5	側	3	2	5.30	4.30	(1.77)	(2.15)	N-36.0°-E	22.79	2間×2間+庇 ?
45	P5	側	3	2	5.10	3.80	1.70	(1.90)	N-45.0°-W	19.38	
46	Q5	側	2	2	3.10	3.00	(1.55)	(1.50)	N-43.0°-W	9.30	
47	Q4	側	3	2	6.15	4.40	2.05	(2.20)	N-40.0°-E	27.06	
47+庇	Q4	側	4	2	8.40	4.40	2.25		N-40.0°-E	36.96	
48	Q3/R4	側	4	3	8.80	6.00	(2.20)	(2.00)	N-45.0°-W	52.80	
48+庇	Q3/R4	側	5	3	11.20	6.00	2.40		N-45.0°-W	67.20	
49	S9/T8-9	側	4	2	8.00	4.80	(2.00)	(2.40)	N-38.0°-W	38.40	

番 号	位 置	種類	間 数		規模(m)		柱間寸法(m)		軸 方 位	面積(㎡)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
50	S9/T8-9	側	4	2	9.00	4.70	2.25	2.35	N-32.0°-W	42.30	
51	R9-10/S9-10	(側)	(2)		3.50		1.75	1.85	N-42.0°-E		
52	R9-10/S9-10	総	2	2	4.00	3.00	2.00	1.50	N-42.0°-E	12.00	
53	U9	総	2	2	4.00	4.00	2.00	2.00	N-35.0°-E	16.00	
54	T13/U13	側	3	2	8.10	4.20	2.70	(2.10)	N-28.0°-E	34.02	中世
55	V11-12/W11-12	側	3	3	6.45	4.70	2.15	1.59	N-42.0°-W	30.32	
56	V11-12/W11-12	総	2	2	3.30	3.00	1.65	1.50	N-30.0°-W	9.90	
57	W11/X11	側	(4)	2	(8.80)	4.70	2.20	2.35	N-34.0°-W	(41.36)	
58	AD17-18/AE17-18	側	2	2	3.60	3.60	1.80	1.80	N-42.0°-W	12.96	
59	S10/T10	側	3	2	6.90	4.70	2.30	2.35	N-43.0°-W	32.43	
60	V14/W14	側	3	2	5.90	4.70	1.97	2.35	N-34.0°-W	27.73	
61	W14-15/X15	側	3	2	5.60	3.60	(1.87)	1.80	N-41.0°-W	20.16	
62	Z19-20	側	3	2	6.60	4.40	2.20	2.20	N-21.0°-W	29.04	
63	W17-18/X16-18/Y17	側	(11)	3	(21.40)	5.35	(1.94)	(1.78)	N-31.0°-W	(114.49)	講もち
64	W14	総	2	2	3.60	3.30	1.80	1.65	N-40.0°-E	11.88	
65	V16/W16	側	3	2	5.70	3.60	1.90	1.80	N-17.0°-W	20.52	
66	W14-15/X15	側	4	2	8.80	5.30	2.20	2.65	N-42.0°-W	46.64	
66+	W14-15/X15	側	4	3	8.80	6.60		1.30	N-42.0°-W	58.08	
67	W17/X17	側	2	2	5.30	3.80	2.65	1.90	N-22.0°-W	20.14	
68	V15/W15	側	3	2	5.40	3.80	1.80	1.90	N-25.0°-W	20.52	
69	Y15	側	2	2	3.60	3.00	1.80	1.50	N-11.0°-W	10.80	
70	X16-17	側	3	2	6.00	4.00	2.00	2.00	N-35.0°-W	24.00	
71	X16-17	側	2	2	3.70	3.00	1.85	1.50	N-28.0°-W	11.10	
72	X15-16	総	2	2	2.90	2.90	1.45	1.45	N-26.0°-W	8.41	
73	X13	側	4	2	7.20	5.70	1.80	1.90	N-30.0°-W	41.04	
73	X13	側	4	3	7.20	5.70	1.80	2.85	N-30.0°-W	41.04	
74	X13	側	3	2	5.00	3.30	1.67	1.65	N-35.0°-W	16.50	
75	X13	側	(4)	3	(6.00)	(3.45)	(1.50)	(1.15)	N-38.0°-W	(20.70)	中世
76	X13	総	2	(2)	(3.60)	3.40	(1.80)	1.70	N-30.0°-W	(12.24)	中世
77	X14	側	2	2	4.40	3.30	2.20	(1.65)	N-44.0°-W	14.52	
78	Y19	側	(3)	2	(7.50)	4.30	2.50	2.15	N-20.0°-W	(32.25)	
79	Z19-20	側	6	2	12.80	3.90	2.13	1.95	N-17.0°-W	49.92	講もち
80	Z20/AA20	側	7	2	14.20	4.00	(2.03)	(2.00)	N-17.0°-W	56.80	中世
80+	Z20/AA20	側	7	3	14.20	5.30		1.30	N-17.0°-W	75.26	中世
81	AA20	側	(3)	2	(6.60)	4.20	2.20	2.10	N-31.0°-W	(27.72)	
82	AA20	側					1.60	1.40	N-16.0°-W		
83	AA19-20/AB19-20	側	4	2	8.40	4.20	2.10	2.10	N-23.0°-W	35.28	
84	AB20-21/AC20-21	側	5	2	10.00	5.60	2.00	2.80	N-20.0°-W	56.00	講もち
85	AB20-21	側	5	2	7.50	4.20	1.50	2.10	N-21.0°-W	31.50	
86	AA20	総	2	2	3.90	3.90	1.95	1.95	N-32.0°-W	15.21	中世
87	AA18-19/AB18-19	総	4	3	8.20	5.40	2.05	1.80	N-33.0°-W	44.28	
88	AB20-21/AC20-21	側	5	2	9.50	5.10	1.90	2.55	N-20.0°-W	48.45	
89	AG18				4.00		2.00		N-35.0°-W		
90	AC21	側	2	2	3.60	3.30	1.80	1.65	N-28.0°-W	11.88	
91	AE18-19/AF18-19	側	4	2	10.80	6.40	2.70	3.20	N-19.0°-W	69.12	
92	AF18	総	2	(2)	4.90	(3.80)	2.45	1.90	N-21.0°-W	(18.62)	
93	AE18	総	2	2	3.20	2.90	1.60	1.45	N-39.0°-W	9.28	
94	AD22	(側)	3	(2)	5.90		2.10		N-26.0°-W		
95	AE19/AF19	側	3	2	5.25	3.40	1.75	1.70	N-25.0°-W	17.85	
96	AD20	側	2	2	4.00	3.30	2.00	1.65	N-41.0°-W	13.20	
97	AE21	側	3	2	7.50	4.40	2.50	2.20	N- 7.0°-W	33.00	
98	AE21	側	2	2	5.40	4.40	2.70	2.20	N- 6.0°-W	23.76	
99	AG22	側	2	2	6.10	4.60	(3.05)	(2.30)	N-33.0°-W	28.06	中世
100	AF22	総	2	(2)	4.50	(3.80)	2.25	1.90	N-39.0°-W	(17.10)	
101	AF22	側	2	1	4.50	2.95	2.25	2.95	N-37.0°-W	13.28	
102	AG22	側	2	2	4.10	3.70	2.05	(1.85)	N-34.0°-W	15.17	

番 号	位 置	種類	間 数		規模 (m)		柱間寸法 (m)		軸 方 位	面積 (㎡)	備 考
			桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行			
103	AH23	側	3	(2)	5.25	(4.80)	(1.75)	2.40	N-35.0°-W	(25.20)	
104	AG20	側	4	3	7.20	5.40	(1.80)	(1.80)	N-32.0°-W	38.88	
105	AH24	側	2	2	3.30	3.10	1.65	(1.55)	N-28.0°-W	10.23	
106	AH18	総	2	(2)	4.70	(4.20)	2.35	2.10	N-38.0°-W	(19.74)	
107	AI20	総	2	2	3.90	3.50	1.95	(1.75)	N-37.0°-W	13.65	
108/109	AH21	側	4	2	8.40	4.40	2.10	2.20	N-38.0°-W	36.96	
110	AI22	側	3	2	3.45	3.20	(1.15)	1.60	N-31.0°-W	11.04	
111	AI21	側	3	3	6.15	5.55	(2.05)	(1.85)	N-40.0°-W	34.13	
112	AI24	側	3	(2)	5.25	(4.30)	(1.75)	2.15	N-39.0°-W	(22.58)	
113	AJ25	総	2	2	3.80	3.20	(1.90)	1.60	N-30.0°-W	12.16	
114	AI22	側	3	2	4.65	3.10	(1.55)	(1.55)	N-32.0°-W	14.42	中世
115	AK25	側	(3)	(2)	(5.70)	(3.10)	(1.90)	(1.55)	N- 2.0°-E	(17.67)	
116	AM25	総	3	2	4.80	2.90	1.60	1.45	N-39.0°-W	13.92	中世
116+庇	AM25	総	4	3	(5.95)	(4.55)	(1.15)	(1.65)	N-39.0°-W	(27.35)	中世
117	AM25	側	3	2	4.80	4.50	(1.60)	(2.25)	N-17.0°-W	18.00	
118	AM24	側	4	3	9.00	5.40	(2.25)	(1.80)	N-43.0°-E	48.60	中世
119	AN24	側	3	(2)	5.70	(4.00)	(1.90)	(2.00)	N-39.0°-W	(22.80)	中世
120	AL21	総	(2)	2	(3.60)	3.60	1.80	1.80	N- 6.0°-W	(12.96)	
121	AK25	側	2	2	3.40	3.00	1.70	(1.50)	N-37.0°-W	10.20	
122	AN26	側	2	3	3.90	3.60	1.95	(1.20)	N-29.0°-W	14.04	
123	AN27	側	(4)	2	(6.15)	3.20	(1.54)	1.60	N- 1.0°-E	(19.68)	
124	欠番										
125	Y20	側	(3)	2	(6.70)	3.80	(2.33)	1.90	N-13.0°-W	(25.46)	
126	Z20	側	4	(2)	11.50	(5.00)	(2.88)	2.50	N-19.0°-W	(57.50)	
D-01	X24	側	1	1	2.30	2.00	2.30	2.00	N-11.0°-W	4.60	
D-02	X23-24/Y23-24	総	6	2							H-05と同一建物跡
D-03	U22-23/V22-23	側	4	2	7.40	4.00	(1.85)	2.00	N-23.0°-W	29.60	
D-04	U22-23/V22-23	側	4	2	9.80	4.80	(2.45)	(2.40)	N-23.0°-W	47.04	
D-05	S21/T21	総	3	3	5.85	5.85	(1.95)	(1.95)	N-35.0°-W	34.22	溝もち
D-06	S21/T21	総	3	3	6.30	6.30	2.10	2.10	N-35.0°-W	39.69	溝もち
D-07	S21/T21	総	3	2	6.15	4.00	(2.05)	(2.00)	N-25.0°-W	24.60	
D-08	S20-21	総	2	2	5.20	4.30	(2.60)	(2.15)	N-30.0°-W	22.36	

参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 1999 『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部義平 1989 『官衙』考古学ライブラリー50 ニュー・サイエンス社
- 石岡憲雄他 1981 『六反田』岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館編
- 稲葉和也・中山繁信 1983 『建築の絵本 日本人のすまい-住居と生活の歴史-』彰国社
- 井上高明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大谷 徹 1999 『馬場裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第230集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大屋道則・栗岡 潤 1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭 1978 「分布論」『日本考古学を学ぶ(1)』P36-47 有斐閣選書
- 川勝政太郎 1966 『古建築入門講話』河原書店
- 木村徳国 1979 『古代建築のイメージ』NHKブックス336 日本放送出版協会
- 櫛 国男 1983 『古代の土木設計』六興出版
- 栗原文蔵 1975 『旧盛徳寺址の発掘調査』行田市文化財調査報告書第2集 行田市教育委員会
- 栗原文蔵・斎藤國夫 1978 『大日種子板石塔婆および古墳の調査』行田市文化財調査報告書第4集 行田市教育委員会
- 栗原文蔵・駒宮史朗 1990 『行田市陣場遺跡の調査』『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- 栗原文蔵他 1978 『原遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第34集 埼玉県遺跡調査会
- 齋持和夫 2000 『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団(同時刊行)
- 恋河内昭彦 1996 『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会
- 合田芳正 1998 『古代の織』考古学ライブラリー66 ニュー・サイエンス社
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史』資料編1 考古
- 小沢良樹他 1982 『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第44集 埼玉県遺跡調査会
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻第1号P13-20 考古学研究会
- 近藤義郎 1985 『日本考古学研究序説』岩波書店
- 埼玉県 1980 『新編埼玉県史』資料編1 原始 旧石器・縄文
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳
- 埼玉県 1984 『新編埼玉県史』資料編3 古代1 奈良・平安
- 埼玉県 1986 『新編埼玉県史』別編3 自然
- 斎藤國夫 1979 『野合遺跡/原第Ⅱ遺跡』行田市文化財調査報告書第5集 行田市教育委員会
- 斎藤國夫 1980 『長野中学校校内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第9集 行田市教育委員会
- 斎藤國夫 1980 『小針遺跡発掘調査報告書-B地区-』行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会
- 斎藤國夫 1981 『さきたま古墳群周辺遺跡群他発掘調査報告書 行田市No.41遺跡』行田市文化財調査報告書第11集
行田市教育委員会
- 斎藤國夫 1981 『小針北遺跡』行田市遺跡調査会報告書第1集 行田市遺跡調査会
- 斎藤國夫 1982 『さきたま古墳群周辺遺跡群発掘調査報告書 陣場遺跡(第3次)/旧盛徳寺址(第3次)』

／内郷遺跡（第1, 2, 3, 4次）行田市文化財調査報告書第13集 行田市教育委員会

- 斎藤岡夫 1983 『旧盛徳寺址周辺遺跡（1次）／小敷田遺跡（2次）』行田市文化財調査報告書第15集 行田市教育委員会
- 斎藤岡夫 1984 『原遺跡発掘調査報告書—第3次調査—』行田市文化財調査報告書第16集 行田市教育委員会
- 斎藤岡夫 1990 『小針遺跡—第3次調査報告書—』行田市遺跡調査会報告書第2集 行田市教育委員会
- 佐藤康二 1998 『砂田前遺跡』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第198集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 寒川 旭 1992 『地震考古学』中公新書
- 堀野 博 1970 『埼玉県行田市長野神明遺跡について』『考古学雑誌』第55巻第4号
- 篠崎 潔 1992 『包樹原・楡下遺跡Ⅳ 奈良・平安時代編3』包樹原・楡下遺跡調査会
- 綜芸舎編集部 1970 『日本古建築細部語彙 社寺篇』綜芸舎
- 高橋俊男・田部井功 1982 『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会
- 高橋俊男他 1983 『下忍・向遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会
- 瀧瀬芳之 1985 『愛宕通遺跡』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第51集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第191集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 武井豊治 1994 『古建築辞典』理工学社
- 田中広明・末本啓介 1997 『中塚遺跡』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪 1990 『行田市船原内郷通遺跡出土縄文後期の土器について』『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- 田部井功・金子眞土 1977 『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第11集 埼玉県教育委員会
- 塚田良道・中島洋一 1988 『瓦塚古墳／下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集 行田市教育委員会
- 富田和夫 1992 『稲荷前遺跡（A区）』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第120集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1994 『稲荷前遺跡（B・C区）』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第145集
財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 島羽政之 1995 『中宿遺跡—推定・榛沢郡正倉跡の調査—』岡部町埋蔵文化財調査報告書第1集 岡部町教育委員会
- 島羽政之 1997 『中宿遺跡Ⅱ—推定・榛沢郡正倉跡の調査—』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第5集 岡部町遺跡調査会
- 島羽政之他 1997 『熊野遺跡 発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第6集 岡部町遺跡調査会
- 島羽政之他 1999 『中宿遺跡Ⅲ』岡部町埋蔵文化財調査報告書第4集 岡部町教育委員会
- 中島利治他 1976 『小針遺跡の調査—A地区—』行田市文化財調査報告書第3集 行田市教育委員会
- 中島利治他 1989 『埼玉古墳群周辺遺跡の検討（Ⅰ）』『調査研究報告』第2号 埼玉県立さきたま資料館
- 中島洋一 1989 『酒巻15号墳／稲荷通遺跡』行田市文化財調査報告書第21集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1990 『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書 船原・内郷通遺跡（2・3・5次）／稲荷通遺跡（2次）
／旧盛徳寺址（4次）／原遺跡（4・5次）／馬場裏遺跡（4次）』行田市文化財調査報告書第23集
行田市教育委員会
- 中島洋一 1991 『行田市市内遺跡発掘調査報告書 陣場遺跡（4次）／旧盛徳寺址（5次）／佐間古墳群（2次）
／船原・内郷通遺跡（6・7次）／百塚通遺跡（2次）／内郷遺跡（5次）／稲荷通遺跡（4・5次）』
行田市文化財調査報告書第24集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1992 『陣場遺跡（5次）発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第26集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 原遺跡（6次）／柳平遺跡／船原・内郷通遺跡（10次）
／馬場裏遺跡（17次）』行田市文化財調査報告書第28集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1996 『石田堤遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第32集 行田市教育委員会
- 中島洋一・門脇伸一 1993 『西谷遺跡 築道下遺跡（1, 2次）』行田市遺跡調査会報告書第3集 行田市遺跡調査会

- 中島洋一・門脇伸一 1994 「酒巻21号墳（2次）／白山愛宕山古墳（1・2次）／白山2号墳」
行田市文化財調査報告書第30集 行田市教育委員会
- 中田 英 1981 「古代東国集落における掘立柱建物の一考察—「溝もち」掘立柱建物遺構の壁構造の復元について—」
『神奈川考古』第12号 P115～134 神奈川考古同人会
- 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録・近畿古代篇」奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所
奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録・近畿原始篇」奈良国立文化財研究所史料第36冊 奈良国立文化財研究所
- 坂野和信・富田和夫 1996 「飛鳥時代の関東と畿内—北関東における7世紀の土器様相—」
『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』P91～108 国際古代史シンポジウム実行委員会
- 堀口萬吉他 1985 「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養学部紀要（自然科学篇）』
21 P243～251
- 前 久夫 1980 「古建築のみかた図典」東京美術選書22 東京美術
- 宮本直樹・鳥羽政之 1997 「滝下遺跡」岡部町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 山中敏史 1994 「古代地方官衙遺跡の研究」塙書房
- 吉田 稔 1991 「小敷田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田 稔 1997 「架道下遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第188集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 一 1990 「鳩山窟跡群Ⅱ」鳩山窟跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 「南北企窟跡群の須恵器の年代—鳩山窟跡の年代を中心に—」『埼玉考古』第27号 P123～145
埼玉考古学会

附篇

築道下遺跡からは古墳時代後期から中世にわたる遺構・遺物が数多く発見されている。

築道下遺跡では約200棟におよぶ古代の掘立柱建物跡が建立され、特徴のひとつにあげられる。これらの掘立柱建物跡のなかには柱材が遺存しているものがあり、これらの樹種を明らかにし、その樹種の特徴から柱材の選択基準の検討や、遺跡周辺の植生等の古環境との比較から柱材調達地域の特定や流通・運搬等の復元を行うため、樹種同定を実施した。

次に古代～中世にかかる平面規模がきわめて小さな井戸跡と推定される遺構の性格推定と、堆積土層から自然環境を復元することを目的として、土壌分析を

実施した。

遺物は古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡・掘立柱建物跡をはじめとする遺構から多量に出土している。このなかで、須恵器は埼玉県内の南北企業跡群産・末野窯跡群産のほか、湖西・群馬・千葉・茨城産や産地不明なものも含まれている。これらの産地を特定し、須恵器流通の把握や築道下遺跡の社会状況の復元を行うため、胎土分析を実施した。

これらの自然科学分析によって導き出された情報は、築道下遺跡を取り巻く自然環境や社会情勢等を復元する資料として、遺跡解明のために活用する。

1. 掘立柱建物跡出土木材樹種同定

はじめに

築道下遺跡は、元荒川左岸の自然堤防上に位置し、発掘調査により古墳時代～中世の集落が検出されている。築道下遺跡では、これまでに土壌や遺物を対象とした自然科学分析調査が実施され、遺跡周辺の古環境や資源利用の一端が明らかにされている(附篇2)。

築道下遺跡では、古代の掘立柱建物跡が数多く検出され、遺跡の特徴のひとつにあげられる。掘立柱建物跡や欄列跡のなかには柱材が遺存しているものがあり、これらの樹種を明らかにし、用材に関する資料を得、用材選択等の検討を行う。

(1) 試料

試料は、掘立柱建物跡や欄列跡の柱材22点(試料8-2・8-3・8-5・8-12~15・9-1~15)である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表1に記した。

方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を製作し、ゴム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバート

バリノ・サーヴェイ株式会社

を製作する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(2) 結果

樹種同定結果を表1に示す。22点の木製品は、針葉樹3種類(カヤ・モミ属・サワラ)、広葉樹4種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ケヤキ)に同定された。

(3) 考察

樹種同定結果を、地区別・遺構別の種類構成として表2に示す。

掘立柱建物跡や欄列跡の柱材には、針葉樹3種類(モミ属・カヤ・サワラ)、落葉広葉樹3種類(コナラ節・クリ・ケヤキ)、常緑広葉樹1種類(アカガシ亜属)が確認され、これらの種類が柱材として利用されていたことがうかがえる。出土した柱材のうち、カヤが約半数を占めており、カヤが特に多く利用されていたことが推定される。

確認された種類のうち、カヤは針葉樹としては重い方で、強度は中程度、割裂性は大きく、加工は容易、保存性特に耐水性に優れる。建築・各種種類・木地・

器具・家具材など各種の用途が知られ、基盤としては最高級品とされる。クリはやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材などの用途が知られている。カヤやクリは掘立柱建物の柱材としては適材といえる。コナラ節やアカガシ亜属も強度が高い点では適材といえる。コナラ節は古くから薪炭材として利用され、材は重硬で加工が困難であるが、器具・機械・樽材などの用途が知られている。アカガシ亜属は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

コナラ節は、古墳時代～古代の関東地方において、竪穴住居の構築材として最も一般的な種類である。クリは、古代においてクヌギ節やコナラ節と共に住居構築材に比較的多く確認されている。ケヤキ・モミ属も住居構築材に確認されているが、コナラ節に比較すると資料数は少ない。モミ属は、荒川右岸地域に出土例が集中する傾向がある（例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社1993a等）。

これらの結果から、築道下遺跡では掘立柱建物や棚列の柱材に、同時期の竪穴住居の構築材と基本的には同様の用材が選択されているものの、強度・耐水性・耐朽性等が考慮されていたことが推定される。

各建物跡の柱の種類構成を比較すると、H区 SB01を除いて、基本的には単一の種類で構成される。埼玉県内では、古代の竪穴住居跡の住居構築材についていくつかの調査例がある（山内1972・1979、高橋1982・バリノ・サーヴェイ株式会社1984）。その結果では、基本的にコナラ亜属やクリが使用されており、H区 SB01-03-04の種類構成とよく似ている。一方カヤは、竪穴住居でコナラ節やアカガシ亜属などに混じり少数検出された例はあるが（バリノ・サーヴェイ株式会社1993）、カヤのみで構成される例は知られていない。カヤは大木になる種類で、樹形も比較的真っ直ぐになる。また、木理も通直で加工が比較的容易である。このような樹形や材質から、掘立柱建物の柱に多く利用された可能性がある。

また、建物によって種類構成に違いがある結果は、

表1 樹種同定結果

試料番号	調査区	遺構	出土位置	時期	用途	樹種
8-2	C区	SB32	Pit08	古代	柱材	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
8-5	C区	SB32	Pit12	古代	柱材	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
9-1	C区	SB63	Pit21	古代	柱材	カヤ
9-2	C区	SB63	Pit22	古代	柱材	カヤ
9-3	G区	SB02	Pit08	古代	柱材	カヤ
8-3	C区	Pit822		古代	柱材	サワラ
8-12	C区	Pit822		古代	柱材	ケヤキ
8-13	F区	SB13	Pit09	古代	柱材	クリ
8-14	F区	SB13	Pit13	古代	柱材	クリ
8-15	F区	SB15	Pit03	古代	柱材	モミ属
9-4	G区	SB02	Pit10	古代	柱材	カヤ
9-5	G区	SB06	Pit12	古代	柱材	カヤ
9-6	G区	SB06	Pit15	古代	柱材	カヤ
9-7	G区	SB06	Pit16	古代	柱材	カヤ
9-8	G区	SB06	Pit17	古代	柱材	カヤ
9-9	H区	SB01	Pit02	古代	柱材	クリ
9-10	H区	SB01	Pit03	古代	柱材	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
9-11	H区	SB01	Pit04	古代	柱材	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
9-12	H区	SB03	Pit07	古代	柱材	コナラ属アカガシ亜属 コナラ節
9-13	H区	SB04	Pit01	古代	柱材	コナラ属コナラ亜属 コナラ節
9-14	H区	SA01	Pit01	古代	櫓	カヤ
9-15	H区	SA02	Pit02	古代	櫓	カヤ

表2 遺構別種類構成

樹種	針葉樹			広葉樹			合計
	モミ属	カヤ	サワラ	コナラ節	アカガシ亜属	クリ	
調査区	遺構						
C区	SB32			2			2
C区	SB63		2				2
C区	Pit822		1			1	2
F区	SB13					2	2
F区	SB15	1					1
G区	SB02		2				2
G区	SB06		4				4
H区	SB01			2		1	3
H区	SB03				1		1
H区	SB04			1			1
H区	SA01		1				1
H区	SA02		1				1
合計		1	10	1	5	3	22

柱の用材が異なっていたことを示唆する。このような違いは、竪穴住居跡の樹種同定などでもしばしば見られ、建物の構造や用途等によって用材が異なっていた

可能性が指摘されている(橋本・高橋・大塚1993)。据立柱建物については、このような種類構成の違いが明らかにされた例が少ないが、竪穴住居跡と同様に建物の構造や規模、用途等が関係している可能性がある。

柱材などは、大型で運搬に多大な労力を必要とするため、基本的には遺跡からそれほど離れていない場所で木材を入手していたと考えられる。実際に、関東地方の竪穴住居から出土した構築材の樹種は、地域によって異なっており、それぞれの地域の植生を反映していると考えられている(高橋・植木1994)。築道下遺

跡では、附篇2で花粉分析を行ったが、花粉化石がほとんど産出せず、周辺の古植生は今のところ不明である。加須市等で行われた花粉分析結果では、基本的にはコナラ亜属等の落葉広葉樹を主とし、アカガシ亜属などの常緑広葉樹を伴う古植生が推定されている(楡井1993)。築道下遺跡で確認されている種類構成を考慮すると、基本的には加須市の花粉分析結果と同様の植生が周辺に見られ、そこから木材を得ていた可能性がある。

引用文献

- 伊東隆夫 1991 「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II」『木材研究・資料』26 P91-189
- 島地 謙・伊東隆夫編 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」P296 雄山閣
- 高橋 教・植木真吾 1994 「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYN02』P5-18
- 高橋利彦 1982 「東松山市上野木籠田遺跡炭化木材樹種鑑定報告」『龍田・輪田』P84-86 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第20集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 能城修一・高橋 教 1996 「中・近世における木材利用」『第11回植生史学会大会シンポジウム中世・近世の植生史 発表要旨』P7-11
- 橋本真紀夫・高橋 教・大塚昌彦 1996 「群馬県椎名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』P92-93
- バリノ・サーヴェイ 1984 「台耕地遺跡試料樹種同定報告」『台耕地(II)』P308 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- バリノ・サーヴェイ 1993a 「中耕遺跡出土遺物の自然科学分析報告」『中耕遺跡』P320-365 埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
- バリノ・サーヴェイ 1993b 「自然科学分析(花粉・材)」『久世原館・番匠地遺跡 第I篇 一概要・附篇一』P74-88 いわき市埋蔵文化財調査報告第33巻 福島県いわき市・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
- バリノ・サーヴェイ 1996a 「自然科学分析」『上千葉遺跡 葛飾区西亀有1丁目12番地点発掘調査報告書』P242-275 葛飾区遺跡調査会調査報告第35集 葛飾区遺跡調査会
- バリノ・サーヴェイ 1996b 「自然科学分析」『柴又帝釈天遺跡VII 葛飾区柴又7丁目都営住宅建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』P294-390 葛飾区遺跡調査会調査報告第36集 葛飾区遺跡調査会
- バリノ・サーヴェイ 1997 「草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種」『草戸千軒町遺跡調査研究報告I 草戸千軒町遺跡出土の下駄』P70-86 広島県立歴史博物館
- 山内 文 1972 「自然遺物」『水深』P211-214 埼玉埋蔵文化財調査報告書第13集 埼玉埋蔵文化財調査会
- 山内 文 1974 「木製品および自然遺物」『青戸・葛西城址調査報告II 東京都・葛飾区・青戸』P12-124 東京都教育委員会
- 山内 文 1979 「木炭の分析」『大山』P305-306 埼玉埋蔵文化財調査報告書第23集 埼玉埋蔵文化財調査会
- 山内 文 1984 「蔵屋敷遺跡出土の木製品について」『蔵屋敷遺跡 日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査』P227-231 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会

- 山内 文 1986 「千葉地東遺跡出土の木製品の樹種について」[千葉地東遺跡 鎌倉県税務所建設工事ともなう鎌倉市御成町所在遺跡の調査] P575-578 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」[植生研究] 特別第1号 P242
- 楢井 尊 1993 「花粉分析」[中川水系 第1分冊 II自然] P140-156 埼玉県

2. 土壌分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

築道下遺跡は、元荒川左岸の自然堤防上に位置し、発掘調査により古墳時代—中世の集落が検出されている。そこで、築道下遺跡における古環境および人間活動等を明らかにするために、以下に示すような課題を設定し、自然科学分析を実施する。

(1) 調査課題と分析項目

E区古代遺構面下土層の堆積時期・環境・周辺植生

古代の遺構面下から、ロームに似た土と黒色土の互層が見られ、白色の軽石も確認された。これらの堆積物の堆積時期・堆積環境・周辺植生等を明らかにするため、重軽鉱物分析・珪藻分析・花粉分析を行う。

F区 BK38Grid 採集黒色土の堆積時期・堆積環境

黒色土が約150cmの層厚で堆積している。この黒色土の堆積時期と堆積環境を明らかにするため、珪藻分析とテフラ分析を行う。

F区古代—中世の井戸跡の性格推定

検出された井戸跡は、井戸やトイレなどの可能性があるため、寄生虫分析・種実同定・珪藻分析から性格を推定する。

(2) E区古代遺構面下土層の堆積時期

・環境・周辺植生

試料

試料はE区深層の試料1～5で、試料3はローム層に類似し、試料4には軽石と考えられている白色粒が混在する。分析時の観察では、試料1は暗灰黄色粘土、試料2は黒褐色砂混り粘土、試料3は褐色砂混りシルト質粘土、試料4は黒褐色砂混りシルト質粘土、試料

5は暗褐色砂混り粘土質シルトである。

結果

・重鉱物分析

いずれの試料も、斜方輝石と単斜輝石を主体とし、不透明鉱物を微量含む。また、角閃石は試料1～4にはほとんど含まれないが、試料5には微量含まれる。

・軽鉱物分析

試料4では、無色透明のバブル型火山ガラスが多量含まれる。この火山ガラスは、その形態および色調から、始良 Tn 火山灰 (AT; 町田・新井1976) に由来すると考えられる。AT は、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前 (町田・新井1992) と考えられている。また、試料中に認められた軽石と考えられた白色粒は、実体顕微鏡による観察では比較的風化が進んでいるが、長石または軽石に由来すると考えられる。ただし、特定のテフラには対比できない。

試料2・3では、中間型および軽石型火山ガラスが比較的多く認められる。この火山ガラスはその形態により立川ローム層最上部ガラス質火山灰 (UG; 山崎1978) に由来すると考えられる。UG は浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は約1.2万年前とされている (町田・新井1992)。

試料1では、「その他」が最も多いが、「その他」を除くと少量の長石を含む。

試料5では、「その他」が最も多いが、「その他」を除くと少量の長石、微量のバブル型火山ガラスおよび石

英を含む。

・珪藻分析

試料1のみ珪藻化石が産出し、試料2～5から珪藻化石を検出することはできなかった。試料1の群集は陸生珪藻が全体の約40%を占め、中でも *Hantzschia amphioxys* が約10%、*Navicula mutica* が約20%と多産した。また、*Navicula elginensis* などの流水不定性種も出現した。

・花粉分析

花粉化石は、試料2でシダ類胞子、試料5でキヌエモ科が各1点認められたのみである。

考察

・堆積時期および由来

築道下遺跡は元荒川左岸の自然堤防上に立地し、周辺には埋没台地を含めた台地が分布している。したがって、築道下遺跡では一次的に降下堆積したATやUGは沖積層の基底近くで検出される可能性があり、今回の沖積層表層付近で検出されたATやUGは流れ込みなどによる二次堆積と考えられる。すなわち、試料2～4は本来周辺の台地上に形成された立川ローム層に由来すると考えられる。周辺の台地上に分布する立川ローム層中のATやUGの産状を考慮すれば、試料4は主に立川ローム層のAT降灰層準付近、試料2・3は主に立川ローム層最上部付近に由来すると考えられる。この結果は、花粉化石や珪藻化石が全く産出しなかったことも整合する。ただし、堆積時期については不明である。

また、試料1・5のような鉱物組成は、周辺台地のローム層および低地の堆積物などにごく一般的に認められるものである。したがって、その由来や堆積時期は不明である。

・堆積環境

珪藻分析の結果、試料1のみ珪藻化石が産出し、試料2～試料5から珪藻化石は検出されなかった。試料1の群集は陸生珪藻が優占し、流水生種その他が稀産する。この結果は、C区北東壁の洪水堆積物の珪藻化石群集とも一致している。このことから、試料1は洪

水性の堆積物と考えられる。

・古植生

現地所見によれば、E区深堀は古代遺構面の直下にあたり、ローム層類似層が観察されている。築道下遺跡は加須低地の西部に相当するが、加須低地では相対的な沈降が激しいため、しばしば埋没したローム層が各地で発見される(堀口1981)。鉱物分析の結果から、分析を行った層も埋没したローム層の一部の可能性はある。ローム層等の風成層では、好気的環境下のために花粉化石は分解する。そのため、今回の分析ではほとんど産出しなかったと考えられる。

(3) F区BK58Grid採集黒色土の堆積時期・堆積環境

試料

試料はF区のBK58Grid(低地)から採集した試料3～9の7点である。分析時の観察では、試料3および試料4は黒褐色砂混り粘土で試料4には粗粒砂が集中する部分認められる。試料5は黒褐色粘土、試料6は褐色粘土、試料7は褐色砂混りシルトブロックが黒褐色砂混り粘土中に混在、試料8・9は黒褐色粘土である。

結果

・テフラ分析

軽石は、試料3～5で灰褐色を呈し発泡はやや良好～やや不良のものが多量～少量認められる。とくに試料4では多量に含まれる。軽石によっては、斜方輝石の斑晶を包有しているものも認められる。この軽石は、その特徴および産出層準により、A.D.1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B; 新井1979)に由来すると考えられる。試料4の試料中に認められる粗粒砂が集中する部分がAs-Bのブロック状堆積物であったと考えられる。

また、試料7の褐色砂混りシルトブロック中には、白色を呈し発泡はやや良好～やや不良の軽石が少量認められる。さらに、本試料中には無色透明の軽石型火山ガラスが多量含まれる。この軽石および軽石型火山ガラスは、その特徴および産出層準により、榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA: 町田・新井1992)に由来する

と考えられる。Hr-FAは榛名火山を給源とし、降灰年代は6世紀初頭と考えられている(町田・新井1992)。したがって、試料7の褐色砂混りシルトがHr-FAに由来するブロック状の堆積物と考えられる。

スコリアは試料3～5において、黒色を呈し発泡は不良のものが微量認められる。しかし、本地点における産状は拡散しているため、その由来および降灰層率は不明である。

・珪藻分析

珪藻化石群集は、試料3～9まで類似している。いずれの層でも *Navicula confervacea* が8～30%、*Gomphonema parvulum* が5～20%と高率で産出している。その他の種は、流水不定性種の *Navicula pupula*、止水性種の *Aulacoseira italica* などが出現している。また、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema gracile* などの沼沢湿地付着性種とされている種も出現した。

考察

・堆積時期

テフラ分析の結果から、試料4がAs-Bの降灰層準、試料7がHr-FAの降灰層準と考えられる。このことから、少なくとも試料4～7が6世紀初頭～12世紀初頭(A.D.1108)にかけて堆積したことが推定される。下位の試料8・9は6世紀以前、上位の試料3は1108年以降に堆積したことが推定されるが、詳細は不明である。

・堆積環境

珪藻分析の結果、試料3～9まで、類似した珪藻化石群集であった。いずれの層でも *Navicula confervacea* や *Gomphonema parvulum* が優占している。*Navicula confervacea* は陸生珪藻に分類されるが、水中にも出現する陸生珪藻B群に含まれている。この化石群集では、その他の陸生珪藻が多産しないことから、流水不定性種に含まれると考えられる。その他の種は、流水不定性種、止水性種などが出現している。更に、*Eunotia pectinalis* var. *minor* などの沼沢湿地付着性種とされている種も多数出現するこ

とから、長期間湿地的な環境が続いていたと考えられる。

(4) F区古代～中世の井戸跡の性格推定

試料

分析試料は、中世の井戸(もしくはトイレ)と考えられている各遺構(SE74、SE115、SE130、SE149、SE197、SE211)から採取された6点である。

結果

・珪藻分析

SE130、SE149、SE197の珪藻化石群集は類似しており、陸生珪藻が全体の70～85%と優占している。陸生珪藻の中でも、*Hantzschia amphioxys* が20～30%、*Navicula mutica* が10～30%と多産している。SE211は珪藻化石の産出数が100個以下と少なかった。SE74では、全体の約50%が陸生珪藻で、なかでも *Hantzschia amphioxys* が約10%、*Navicula mutica* が約15%と多産するが、流水不定性種の *Frustulia vulgaris* が約20%で最も優占し、*Gomphonema parvulum* や *Nitzschia debilis*、*Nitzschia premissima* などの流水不定性種も産出する。SE115では、全体の約40%が陸生珪藻で、中でも *Navicula Contebta* が約10%産出し、*Nitzschia debilis*、*Nitzschia premissima*、なども産出した。また、真流水性種である *Surirella angusta* が約15%で最も優占し、*Frustulia valgalis*、*Navicula gregaria* などの流水不定性種も産出した。

・寄生虫分析

SE74を除く各遺構では花粉化石が少ないながら認められたが、寄生虫卵は全く検出されなかった。SE115では、ナデシコ科、アカザ科、イネ科などの草本類の花粉化石が比較的多くみられる。

・種実同定

種実遺体は、SE211、SE197、SE115から検出されるが、その中でも特にSE115が多く検出される。傾向はほぼ近似し、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、カタバミ属が多い傾向にある。ほかにクワ属(クワ科)、イネ科、カヤツリグサ科、カナムグラ(クワ科カラハナ

ソウ属)、タデ属(タデ科)、イヌコウジュ属(シソ科)が検出されている。

考察

トイレ遺構では、寄生虫卵が多量(堆積物1ccあたり数千個)に検出され、糞便と共に排出された種実などの植物遺体が多く見られ、かつ糞便に集まるような昆虫の化石が検出されると考えられている(金原・金原1994)。今回の場合、寄生虫卵が全く検出されず、ウリやイチゴ類など種ごと食するような種実も検出されていない。これらのことを考慮すると、少なくともトイレの可能性は低い。

珪藻分析の結果では、SE130、SE149、SE197の珪藻化石群集は類似しており、陸生珪藻が多産している。陸生珪藻の中でも、耐乾性の高いA群に含まれるものが多いことから、比較的乾いた場所であったと考えられる。また、SE211では陸生珪藻が優占するが、産出した珪藻化石の総数が100個以下と少ない。そのため、堆積速度が速かったことや、好気的環境で分解・焼失した可能性もある。SE74では、全体的には陸生珪藻が多産するが、流水不定性種の *Frustulia vulgaris* が約20%と最も多く産出した。また、*Gomphonema parvulum* や *Nitzschia obutusa* var. *scalperifoemis* などの流水不定性種が産出した。また、SE115では、陸生珪藻の *Navicula contenta* が多産し、*Nitzschia devilis*、*Nitzschia brevissima* などの陸生珪藻も産出した。しかし、真流水性種である *Surirella angusta* が最も優占し、*Furustulia vulgaris*、

Navicula gregaria などの流水不定性種も産出した。このことから、SE74、SE115では水の影響が考えられる。これは、SE115で花粉化石が比較的多く産出した結果とも調和的である。

築道下遺跡は加須低地に立地しており、この土壌が機能していたと思われる古代～中世では河川の流路が集中しており、洪水堆積物が認められることから氾濫の影響を受けやすい場所であったと思われる。これらのことから、河川の影響などにより、流れ込んだ流水性の珪藻化石が検出された可能性がある。

花粉・種実、共に保存状態は概して悪いものの、草本類が多い。花粉・種実化石で多く検出されたイネ科、アカザ科、ナデシコ科、カタバミ属等はいわゆる「人里植物」に含まれる種類が多い。これらは人里など開けた草地に多く見られる。珪藻分析の結果を考慮すれば、河川の影響などにより周囲から流れ込んだものであり、当時の周囲植生を反映していると考えられる。このことから、遺構周辺には検出された草本類が主体の植生が広がっていたと考えられる。

各植物化石の分析結果から、遺構により堆積環境などに多少の違いが認められる。しかし、機能や用途を示すような結果は得られず、現時点では各遺構の用途の詳細は不明である。

注) 土壌分析にかかる分析方法および分析結果の図表・写真図版は割愛した。

なお、分析報告書は平成12年度より埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

引用文献

- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』179 P41-52
安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 P73-88
伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 P23-45
金原正明 1994 「植物遺体分析による農耕の復元について」『日本文化財科学会第11大会大会研究発表要旨集』P51-52
金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構—右京七条一坊西北坪—』P12-15 奈良国立文化財研究所
金原正明・金原正子 1994 「堆積物中の情報の可視化」『可視化情報』14 (53) P79-84
砂屑性堆積物研究会編 1983 「堆積物の研究法」『地学双書』24 P377 地学団体研究会
早津賢治 1988 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロロジー—ATにまつわる議論に関係して—」『考古学研究』34 P18-32

- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』P62~63
- 堀口萬吉 1981 「関東平野中央部における歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクホタ』19 P6~9
- 町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—給良 Tn 火山灰の発見とその意義—」『科学』46 P339・347
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』P276 東京大学出版会
- 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究』16 P231~246
- Fork,R.L. and Ward,W. 1957 「Bracons river bar; a study in the significance of grain size parameters」『J.Sed. Petrol』27 P3~26
- Krammer,K. and Lange-Betalot,H. 1986 「Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae」『Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa』P876 Gustav Fischer Verlag
- Krammer,K. and Lange-Betalot,H. 1988 「Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae」『Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa』P536 Gustav Fischer Verlag
- Krammer,K. and Lange-Betalot,H. 1991a 「Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230P, Gustav Fischer Verlag
- Krammer,K. and Lange-Betalot,H. 1991b 「Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema」『Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa』P248 Gustav Fischer Verlag
- Krammer,K. 1992 「PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa」『BIBL10THECA DIATOMOLOGICA BAND』26 P1~353 BERLIN・STUTTGART
- Powers,M.C. 1953 「A new roundness scale for sedimentary particles」『J.Sed.Petrol』23 P117~119
- Wentworth,C.K. 1922 「A scale of grade and class terms for clastic sediments」『J.Geo』30 P377~392

3. 胎土分析

（株）第四紀地質研究所 井上 巖

(1) 試料

分析に供した試料は11点で、第1表胎土性状表に示すとおりである。これに加えて、既に「築道下遺跡I」

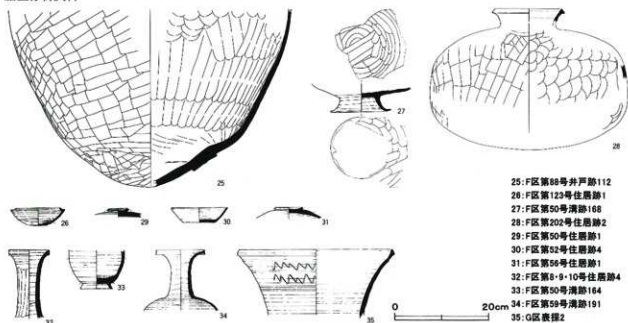
（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第188集）、「築道下遺跡II」（第199集）、「築道下遺跡III」（第245集）で分析を行っている44点を含めた計55点の考察を行っ

第1表 胎土性状表

試料No.	タイプ 分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物					
		Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Hb	Qt	Pl	Crist	Mullite	Pyrite
築道下-25	D	14	20		2374	104	226	183	156
築道下-26	D	14	20		1842	96	121	228	178
築道下-27	A	5	20	76	1891	317	137		129
築道下-28	D	14	20		2171	506	117		
築道下-29	D	14	20		2092	95	838	149	143
築道下-30	D	14	20		1532	74	199	171	145
築道下-31	D	14	20		2664	89	939	237	194
築道下-32	D	14	20		3771	202	132	67	
築道下-33	D	14	20		2039	86	363	179	10
築道下-34	D	14	20		2376	100	286	187	156
築道下-35	D	14	20		2045	90	438	215	191

Hb:角閃石 Qt:石英 Pl:斜長石 Crist:クリストバライト Mullite:ムライト Pyrite:黄鉄鉱
 ※ Mont(モンモリロナイト) Mica(雲母類) ChFe(緑泥石一次反射) ChMg(緑泥石二次反射) K-fels(カリ長石)
 Halloy(ハロイサイト) Kaol(カオリナイト) Au(普通輝石) Py(紫蘇輝石)は No Count

胎土分析試料



25: F区第88号井戸跡112
 26: F区第123号住居跡1
 27: F区第50号溝跡168
 28: F区第202号住居跡2
 29: F区第50号住居跡1
 30: F区第52号住居跡4
 31: F区第58号住居跡1
 32: F区第8-9-10号住居跡4
 33: F区第50号溝跡164
 34: F区第59号溝跡191
 35: G区表層2

第2表 化学分析表

試料No.	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total
築道下-25	0.92	0.94	19.86	69.52	2.61	0.64	1.09	0.73	3.56	0.13	100.00
築道下-26	0.97	0.68	21.59	67.33	2.75	0.55	1.03	0.50	4.61	0.00	100.01
築道下-27	1.09	1.63	21.11	62.16	2.56	1.19	1.54	0.81	7.91	0.00	100.00
築道下-28	0.62	0.84	25.30	55.34	2.88	0.59	1.56	0.98	11.87	0.02	100.00
築道下-29	0.39	0.03	22.21	68.82	2.32	0.44	1.20	0.31	4.01	0.28	100.01
築道下-30	0.42	0.52	21.77	65.23	3.71	0.53	1.13	0.57	6.12	0.00	100.00
築道下-31	0.94	0.13	21.38	67.02	1.52	0.52	1.56	0.62	6.23	0.08	100.00
築道下-32	0.29	0.38	25.52	65.50	1.84	0.36	1.06	0.66	4.39	0.01	100.01
築道下-33	0.65	0.25	18.98	69.77	2.90	0.42	0.85	0.47	5.47	0.24	100.00
築道下-34	0.31	0.42	19.07	71.28	2.41	0.27	0.92	0.59	4.56	0.16	99.99
築道下-35	0.63	0.52	21.37	70.59	2.53	0.23	1.02	0.45	2.64	0.02	100.00

第3表 タイプ分類一覧表

試料No.	タイプ分類	試料No.	タイプ分類	試料No.	タイプ分類	試料No.	タイプ分類	試料No.	タイプ分類
築道下I-1	D	築道下I-12	D	築道下II-3	D	築道下III-14	D	築道下IV-25	D
築道下I-2	D	築道下I-13	D	築道下II-4	D	築道下III-15	D	築道下IV-26	D
築道下I-3	D	築道下I-14	D	築道下II-5	D	築道下III-16	D	築道下IV-27	A
築道下I-4	D	築道下I-15	D	築道下II-6	D	築道下III-17	D	築道下IV-28	D
築道下I-5	D	築道下I-16	D	築道下II-7	C	築道下III-18	D	築道下IV-29	D
築道下I-6	C	築道下I-17	D	築道下II-8	D	築道下III-19	D	築道下IV-30	D
築道下I-7	C	築道下I-18	B	築道下II-9	D	築道下III-20	D	築道下IV-31	D
築道下I-8	D	築道下I-19	B	築道下II-10	D	築道下III-21	D	築道下IV-32	D
築道下I-9	D	築道下I-20	B	築道下II-11	D	築道下III-22	D	築道下IV-33	D
築道下I-10	D	築道下II-1	D	築道下III-12	D	築道下III-23	D	築道下IV-34	D
築道下I-11	D	築道下II-2	D	築道下III-13	D	築道下III-24	D	築道下IV-35	D

た。

分析はX線回折試験・化学分析を実施した。なお、実験条件および結果の取り扱いについては、『築道下遺跡I』に掲載されているため割愛した。

(2) X線回折試験結果

タイプ分類

第3表タイプ分類一覧表に示すように土器胎土はA～Dの4タイプに分類された。

Aタイプ：Hb 含、Mont・Mica・Ch 欠

Bタイプ：Mica・Hb・Ch 含、Mont 欠

Cタイプ：Mica 含、Mont・Hb・Ch 欠

Dタイプ：Mont・Mica・Hb・Ch 欠

須恵器は高温で焼成されているために鉱物が分解し、ガラスに変質している。そのため、Mont・Mica・Hb・Ch の4成分が検出されない。最も多いタイプはDタイプで、Cタイプは3点で、Aタイプは1点である。原土はすべてBタイプで、土層断面上の差はない。

石英 (Qt) - 斜長石 (P 1) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は背後地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々が固有の石英と斜長石比を有していると言える。

Qt-P 1 相関から、I-III とその他に分類された。

I : P 1 が250以上の領域に分散

末野産の須恵器が集中

II : Qt が800~3700、P 1 が50~150の領域

湖西と秋間1の領域が重複

III : Qt が3800~6000、P 1 が50~150の領域

秋間2の領域

湖西、秋間1、金井窯趾群は領域が重複するか末野窯跡の土器は明らかに焼成温度が低くP 1 が異なる領域にあり、明瞭に分類される。

(3) 化学分析結果

化学分析の結果は第2表化学分析表に示した。この分析結果に基づいて SiO_2 - Al_2O_3 、 Fe_2O_3 - MgO 、 K_2O - CaO の相関関係を検討した。

SiO_2 - Al_2O_3 の相関について

SiO_2 - Al_2O_3 の相関から、I-III に分類された。

I : SiO_2 53~67%、 Al_2O_3 17~27%の領域

末野窯跡の須恵器集中

II : SiO_2 64~67%、 Al_2O_3 23~27%の領域

金井窯趾群の須恵器集中

III : SiO_2 66~76%、 Al_2O_3 15~23%の領域

秋間窯跡群の須恵器と湖西窯跡群の須恵器共存

Fe_2O_3 - MgO の相関について

Fe_2O_3 - MgO の相関から、I-IV に分類された。

I : Fe_2O_3 が3~8%、 MgO が0.2~1.0%の領域

秋間窯跡群の須恵器集中

II : Fe_2O_3 2~4%、 MgO 0~0.7%の領域

湖西窯跡群の須恵器、原土集中

III : Fe_2O_3 4~8%、 MgO 0~0.5%の領域

金井窯趾群の須恵器集中

IV : Fe_2O_3 9~13%、 MgO 0.2~0.8%の領域

末野窯跡の須恵器分布

K_2O - CaO の相関について

K_2O - CaO の相関から、I-III に分類された。

I : K_2O 1.3~2.0%、 CaO 0.2~1.0%の領域

金井窯趾群の須恵器集中

II : K_2O 1.0~4.0%、 CaO 0~1.0%の領域

秋間窯跡群、湖西窯跡群、末野窯跡の須恵器混在

III : K_2O 2.4~3.4%、 CaO 0~1.0%の領域

湖西窯跡群の須恵器集中

(4) まとめ

・土器胎土はA-Dの4タイプに分類され、Bタイプは原土、Dタイプは高温で焼成された須恵器で、鉱物が分解してガラス化したものに分類された。

・X線回折試験に基づくQt-P 1相関では末野窯跡の須恵器はIに集中し、P 1の強度が高く、焼成温度が他と比較して低い。IIには湖西窯跡群と秋間窯跡群の1の須恵器が集中し、IIIには秋間窯跡群の2の須恵器が集中する。秋間窯跡群と湖西窯跡群の須恵器は領域を同じくし、類似する傾向が認められる。

・化学分析結果では湖西窯跡群と秋間窯跡群の須恵器は SiO_2 - Al_2O_3 相関では同じ領域にあり明瞭に分類されないが、末野窯跡と金井窯趾群の須恵器は異なる

第4表 土器分類表

試料No	タイプ分類	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	P I	分析結果	備	考		
築道下I-1	C	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	須恵器	高台坏	8c	湖西
築道下I-2	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	蓋	8c	湖西
築道下I-3	C	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	須恵器	長頸壺	8c	湖西
築道下I-4	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	蓋	8c	湖西
築道下I-5	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	高台坏	8c	湖西
築道下I-14	C	不明	不明	不明	不明	不明	須恵器	蓋	8c	群馬
築道下I-15	C	不明	不明	不明	不明	不明	須恵器	高台坏	6c	群馬
築道下I-16	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	坏	8c	群馬
築道下I-17	C	不明	不明	不明	不明	不明	須恵器	蓋	8c	群馬
築道下II-1	C	末野	末野		高	末野	須恵器	蓋	8c	末野 or 群馬
築道下II-2	C	新治	新治	新治		新治	須恵器	坏	8c	常陸(新治)
築道下II-3	C	秋間	秋間	秋間		秋間	須恵器	坏	8c	湖西
築道下II-4	C	秋間	秋間	?秋間		秋間	須恵器	蓋	8c	湖西
築道下II-5	C	金井	秋間	秋間		秋間	須恵器	蓋	8c	湖西
築道下II-6	C	末野?	末野?		高	末野?	須恵器	坏	8c	新治?
築道下II-7	B	秋間	秋間		高	秋間	須恵器	坏	8c	不明
築道下II-8	C	末野	末野			末野	須恵器	坏	8c	不明
築道下II-9	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	坏	8c	秋間 or 金井
築道下II-10	C	金井	秋間	秋間		秋間	須恵器	蓋	8c	不明
築道下II-11	C	末野	末野		高	末野	須恵器	壺	8c	千葉市周辺
築道下III-12	C	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	須恵器	長頸壺	8c	秋間
築道下III-13	C	末野	末野	高	高	末野	須恵器	蓋	8c	群馬?
築道下III-14	C	金井	秋間	?秋間	?	?秋間	須恵器	壺	8c	湖西
築道下III-15	C	秋間	?秋間	秋間		秋間	須恵器	長頸壺	8c	湖西
築道下III-16	C	湖西	湖西	湖西?	湖西	湖西	須恵器	蓋	8c	湖西
築道下III-17	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	高台付坏	8c	秋間 or 金井
築道下III-18	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	高台付坏	8c	秋間 or 金井
築道下III-19	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	高台付坏	8c	秋間 or 金井
築道下III-20	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	高台付坏	8c	秋間 or 金井
築道下III-21	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	高台付坏	8c	湖西
築道下III-22	C	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	須恵器	高台付坏	8c	湖西
築道下III-23	C	末野	末野	?秋間	高	末野	須恵器	蓋	8c	金井?
築道下III-24	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	坏	8c	湖西
築道 FIV-25	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	壺	8c	湖西
築道 FIV-26	C	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間	須恵器	坏	8c	湖西
築道 FIV-27	A	末野	末野		高	末野	須恵器	高台付壺	8c	? (群馬)
築道 FIV-28	C	末野	末野		高	末野	須恵器	横瓶	8c	末野?
築道 FIV-29	C	秋間	金井	秋間	秋間	秋間	須恵器	蓋	8c	秋間
築道 FIV-30	C	末野	末野	秋間		不明	須恵器	坏	8c	?
築道 FIV-31	C	秋間	金井	金井		金井?	須恵器	蓋	8c	秋間
築道 FIV-32	C	金井	金井	金井		金井	須恵器	長頸壺	8c	藤岡(金井)
築道 FIV-33	C	湖西	秋間	湖西	湖西	湖西	須恵器	長頸壺	8c	湖西
築道 FIV-34	C	湖西	秋間	湖西	湖西	湖西	須恵器	長頸壺	8c	湖西
築道 FIV-35	C	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	須恵器	壺	8c	湖西

る領域にあり、明瞭に分類される。Fe₂O₃-MgOの相関では湖西窯跡群、秋間窯跡群、金井窯跡群、末野窯跡の須恵器は異なる領域にあり、明瞭に分類された。

・これらの分析結果に基づいて第4表土器分類表を作成した。現在の各窯跡の分析データと対比した分類で

は湖西窯跡群と言われる須恵器のうち大型の長頸壺類は湖西窯跡群の須恵器と一致するか?坏や蓋などは秋間窯跡群の須恵器の領域に分析値が入る。この点については今後の課題として残る。

(注) 分析報告書は平成12年度より埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

写真図版



築道下遺跡 (合成写真)



築道下遺跡E区全景（北側より）



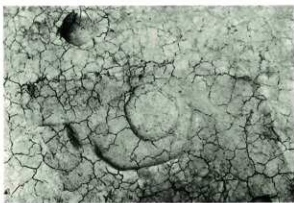
築道下遺跡E区全景（直上より）



築道下遺跡E区全景 (南側より)



E区第1号住居跡



E区第1号住居跡貯蔵穴



E区第1号住居跡カマド



E区第1号掘立柱建物跡



E区第2号掘立柱建物跡



E区第1号茶毘跡



E区第3号掘立柱建物跡



E区第1号茶毘跡



E区第27号土坑



E区第3号茶毘跡



E区第20号井戸跡



E区第3号茶毘跡



E区第2号茶昆跡



E区第6号茶昆跡



E区第4号茶昆跡



E区第6号茶昆跡



E区第5号茶昆跡



E区第8号茶昆跡



E区第7号茶昆跡



E区第9号茶昆跡



E区第1号住居跡 第10図—1



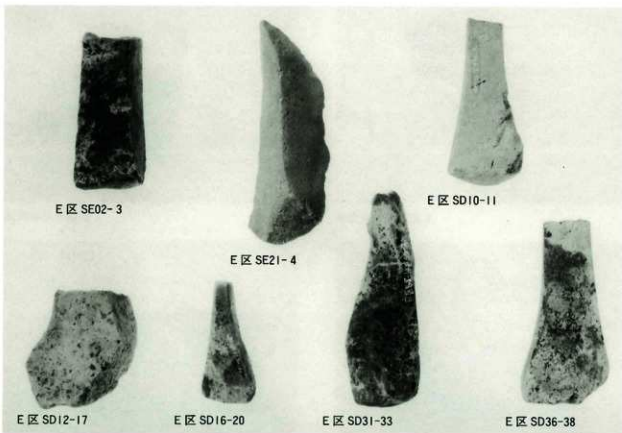
E区第1号住居跡 第10図—3



E区第1号住居跡 第10図—2



E区第3号土壇 第21図—1



E区 SE02-3

E区 SE21-4

E区 SD10-11

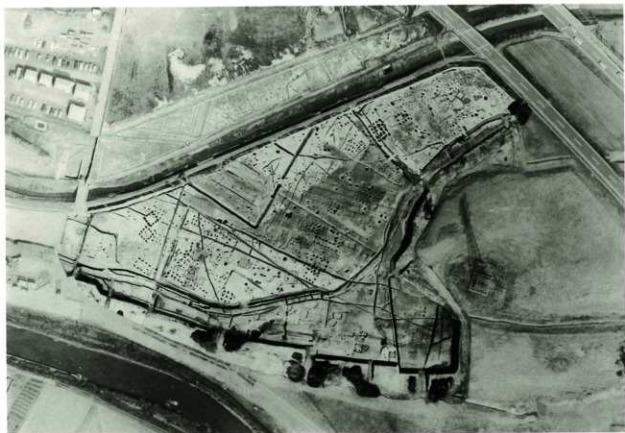
E区 SD12-17

E区 SD16-20

E区 SD31-33

E区 SD36-38

E区出土礫石



茶道下遺跡F区(合成写真)



茶道下遺跡F区(西から)



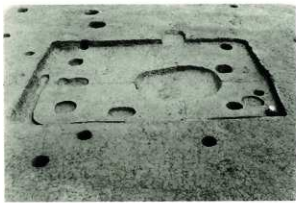
築道下遺跡F区（南から）



築道下遺跡F区（直上から）



F区第1号住居跡



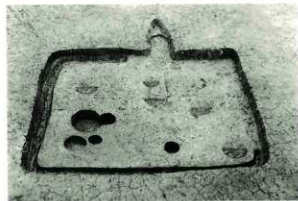
F区第4号住居跡



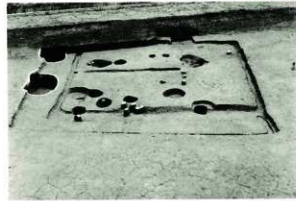
F区第2号住居跡



F区第4号住居跡遺物出土状況



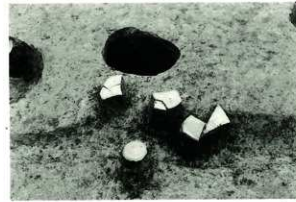
F区第3号住居跡



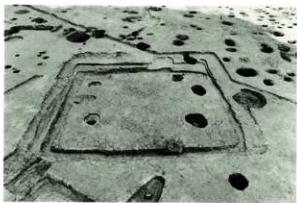
F区第5・6・7号住居跡



F区第3号住居跡カマド



F区第5・6・7号住居跡遺物出土状況



F区第8·9·10号住居跡



F区第12·13号住居跡



F区第8·9·10号住居跡遺物出土狀況



F区第16号住居跡



F区第11号住居跡



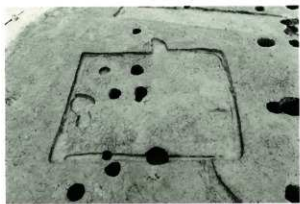
F区第17·18·25号住居跡炭化物検出狀況



F区第12·13·14·15号住居跡



F区第17·18·25号住居跡



F区第19号住居跡



F区第26号住居跡



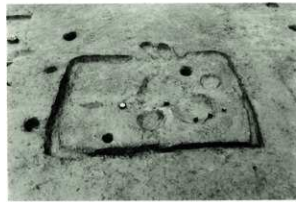
F区第20・21・23号住居跡



F区第26号住居跡貯蔵穴



F区第23号住居跡カマド



F区第27号住居跡



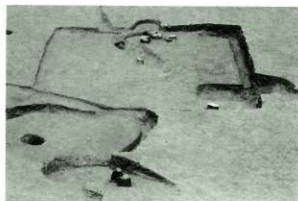
F区第22号住居跡



F区第28号住居跡



F区第29号住居跡・第55号土壌



F区第34号住居跡



F区第30号住居跡



F区第34号住居跡カマド



F区第31・32・33号住居跡



F区第35号住居跡



F区第33号住居跡



F区第35号住居跡カマド